

Nicholas Marsh William Blake: The Poems

宮 町 誠 一

第2章 無垢と経験の世界における自然¹

『無垢と経験の歌』における自然は、第1章で見てきたように田舎と町という単純な対照関係以上に複雑な様相を呈している。特に、野生的な自然は『無垢の歌』の冒頭の詩でも途中で消滅していくことに注目した。このことは無垢の世界は、あるいはその外観は、まったく「野生的」ではないことを意味している。つまり、傷つきやすい子供や子羊のような生き物が安全と平安を維持できるのは、限られた自然の一部でしかなかった。「無垢」と「経験」は無垢喪失前後の物語を提示しているという概念を超えていたし、それは同一世界の対立的な認知法であることを示唆してきた。従って、『無垢と経験の歌』における自然のテーマを探求するこの章では、ブレイクは曖昧な現実、真理の異なる認知法を探っているという認識を持って始めたい。自然を見つめるということは、この詩集と他の作品も含めて、ブレイクの「ヴィジョン」、つまりものの見方を問うという関心に繋がっていく。

ブレイクの詩は読者を自らの解釈へと駆り立て、読者の解釈が同時に異なるレベルで機能することがしばしばあることを理解するよう仕向けている。例えば、「大地の答え」の作品における大地は、個人的レベルと社会的レベルでの難しさを抱えている。この詩は心理学的課題を探求しており、登場人物は落ち込んでおり、その現実の見方は恐怖によって歪められている。同時にこの詩は社会に対する批評でもある。全国民が恐怖のあまり奴隷化し、現状を批判することも出来ず、自由の権利を主張することも出来ない状態にあることを明らかにしている。何故なら、専制的な法律と権威主義的な律法しか人々は知らなかったし、人々はそのような現実しか想像出来なかったのである。

この章における自然のテーマの論議は上記の2つの議論によって複雑なものとなっている。まず、認知法に関しては、これからの詩の中で常に入れ替わっているという事実を認めなくてはならない。そこで次のような疑問が湧いてくる。この詩における自然の認識の仕方とは何なのか？ 今の見方の裏にある自然の真理とは何なのか？ 第2に、ブレイクが提示している人間と自然の関

係を検討することになる。しかし、これからの作品では個人的コンテキストと社会的コンテキストの両面でこの関係が展開していることを意識していなければならない。それでは、『無垢の歌』の「夜」を詳細に検討することから始めよう。

「夜」

お日さまが西に沈んで、
夕べの星が輝く。
鳥たちは巣のなかで静かだ、
私は自分のねぐらを捜さねばならない。
月は花のよう、
天の高いあずまやに
無言の歓びをたたえて
坐って夜に微笑む。

さようなら、緑の野原と幸せな木立よ、
羊の群れが楽しんでいたところよ。
子羊が草を食んでいたところで、音もなく動くのは
輝く天使たちの足。
目に見えず天使は祝福を注ぐ、
休みなく喜びを、
ひとつひとつの蕾や花に、
ひとつひとつの眠っている胸に。

天使たちは心配事のない巣をすべてのぞき込む、
鳥たちが暖かく覆われているところを。
あらゆる獣がいる洞窟を訪れ、
みんなを害から守ってあげる。
もし眠っているはずなのに
だれかが泣いているのを見つけたら、
彼らの頭に眠りを注いであげ、
寝床のそばに坐ってあげる。

狼や虎が獲物を求めて吼えるとき、

天使は哀れみながら立って涙を流し、
 彼らの飢えを追っ払ってあげ、
 彼らを羊に近寄らせないようにする。
 しかしもし彼らが恐ろしく突進したら、
 天使たちは、とても注意深く、
 ひとつひとつの柔和な霊を受け取り、
 新しい世界を受け継がす。

そこでは獅子の赤らんだ眼は
 黄金の涙を流すだろう。
 そしてやさしい叫びを哀れみ、
 囲いのまわりを歩きながら言う。
 「怒りは神の柔和によって、
 病いは神の健康によって、
 追い払われるのだ、
 私たちの不滅の日から。

そして今、鳴いている子羊よ、
 私はおまえのそばで横になって眠れるのだ。
 おまえの名前を持つあの方のことを思い、
 おまえにならって草を食み、涙を流す。
 なぜなら、生命の川で洗われて
 私の輝くたてがみは永遠に
 黄金のように光るであろう、
 私の羊の囲いを守っているときに」²

まず韻律の検討から始めよう。韻律上の流れを乱さないように追加されたり、省略された音節を別にすると、この詩にはほとんど不規則な点はない。例えば、'With silent delight' と 'sits and smiles on the night' に見られるように、強弱弱格の中にひとつの弱勢かふたつの弱勢で始まる音節があったり、同じ行が'night'や'delight'のように強勢で終わっており、第一連の'flower'と'bower'のように下降調で弱勢の音節で終わっている。これらは不規則な韻律と言うよりは変異形であり、詩全体としては最初から最後まで一定してリズムカルに流れている。この安定性は、実質的な不規則な韻律箇所はほとんどないことを強調している。23行目では天使が落ち着きなく、恐れおののく生き物たちの頭に眠りを注いでいる時 ('pour sleep')、強勢が2つの音節に及んで

いる。この2重強勢がその行の調子を長らえ、ゆっくりとした調子を維持し、眠りの癒しの効果を伝えている。27行目の最初の詩脚は'seeking'では逆転しているので、この驚きの強勢は、野獣の残虐性の原因であるその「飢え」を払いのける天使の努力を際立たせているように思える。40行目は不規則であり、強弱弱調の4連句では弱強勢になっている。このことがより規則正しい調子を与え、従って'our immortal day'に必然性の観念をもたらしている。最後に、46行目では'bright mane'が'pour sleep'のときと同じように強勢を延長している。しかし、この場合における効果は、その意味と多分この2つの単語のしっかりした純粋な母音のおかげで、緊張を和らげるというよりは元気を与えているように思える。

これまで見てきたように不規則な韻律の影響は大きくはないと言える。ブレイクが韻律上の多様性を駆使する大家であったことを示す証拠であるが、この詩全体で交互に出現する弱強勢と強弱弱勢の4連句によって達成している調和性ほどは、読者に強烈な影響を与えてはいない。弱強勢の重い調子と強弱弱勢の微妙な調子が相互に響きあうことで、それぞれの調子が際立っている。この韻律が提供する美的満足度を具体的に詳述することは難しい。とりあえず、重いリズムと軽いリズムを交互に遣うことは無垢の世界、「緑の野原と幸せの森」という田園の世界と、暗黒、暴力、死が対峙している詩作品には特に相応しいと言える。

『無垢の歌』の大半の詩と同じ様に、天使と獅子に与えられた役割には驚かされてもこの詩のストーリー自体は分かり易い。第一連では夕方から夜になり、この時間の経緯は、無垢は朝から昼間の時間帯に関連していることを直ちに想起する。一日の終わりの感じと夜の安らぎの場を求める欲求は最初の4行では強烈に感じられる。「沈黙する」小鳥と夕陽は「無垢」の詩人の心的状態を設定し、詩人自身も身を守る「巣」を見つける必要性を認めている。詩人の声もまた一日の終わりには止んでいることを示唆している。しかし、月が昇ると新しい動きが始まっている。「花のような」という単純な直喩が複雑な効果をもたらしている。月は通常色彩を薄めるが、「花」は鮮烈な色彩感を連想させる。「歓喜」と「微笑」では夜の善意溢れる幸福感が満ち、「巣」の概念は平安と安全の場であり、月が「天の高いあずまや」に収まっているように相互に響きあっている。

第二連は無垢の世界、「羊の群れが歓喜した」田園的背景に別れを告げる言葉で始まっている。時間と生活の推移につれて、すべてが「経験」という夜の訪れ、危険の到来に備えているように思える。しかし、再度この連の後半で意外な夜の肯定的ヴィジョンを紹介している。第一連で月が「微笑えんで」いるように、第二連では天使が登場し、繊細で傷つき易い「ひとつひとつの蕾と花」に「休みなく祝福と歓喜」を注いでいる。

第三連では見回りをしている天使の姿が描かれている。巣には心配事はないし、危険に対しても無知であるという意味で「物思いが無い」。天使たちは一見心温かで思いやりで溢れているが、ブレイクは天使の行動に厳密である事に注意すべきである。天使たちは小鳥の巣を「覗き込み」、猛獣の元を「訪れている」。天使の唯一の効果的行動は、「泣いている」生き物が体現している恐

怖や悲しみに向けられたものであり、これらの感情を落ち着け、眠りに誘う。天使は「害から守るために」恐怖や悲しみを宥め、眠りに誘う。しかし、その行為は、見守りや生き物たちの心情に影響を与える事に限定されている。天使たちは実際の出来事にいかなる形でも介入する事はない。

第四連は天使の役割をより詳細に語っている。繰り返しになるが、天使は静的であり、気持ちや感情を楽にする事にその努力を傾注している。天使は「哀れみをかけ、立って涙して」おり、貪欲な狼や虎から羊を守る戦略として「その飢えを追い払う」努力をしているにすぎない。天使の哀れみは野生の狼と虎に向けられ、天使が抑えようとしている「飢え」は猛禽類の流血への欲求である。天使は全編を通して見守りといたわりの役割に「十分関心を」向けているが、野生の獣が自然の命ずるところに従い、「恐ろしい勢いで突進し」、子羊や羊を殺すと、天使は殺戮された無垢の魂を受け入れ、「新世界」へ送る準備を整えている。その一方で、天使はその殺戮の行為を妨げようとはしない。

最後の2連は死の後に続く「新世界」について解説している。この詩は次第に獅子に焦点を集中させ、獅子は「黄金の涙」で叫ぶ姿でこの部分を開始し、最終連の全体を通じて獅子の有様を語っている。哀れみが重要な用語である。野生の獣は、以前はその空腹ゆえに天使が哀れみをかけていたが、自らがその餌食に哀れみをかけるようになり、「群れを守っているように」、肉食動物から保護者へと変容が可能となった。キリスト教的メッセージを強調するために獅子は、「彼の柔和さによって」（つまり、キリストの柔和さで）「怒りを追い払う」。キリストの「柔和さ」という概念は天使が体現し、天使が介入し行動することはなかったが、残酷な本能に駆られた野生の獣を哀れんでいた。獅子の変容は明るい光と彼の涙とたてがみを「黄金」に例える2つの直喩によって強調されている。この詩のこの様な光り輝く句を支持しつつ、獅子は「身を清め」、夜は自然界におかれ、その結果すべてが「不滅の日」に存在している。

ブレイクは、この流れるような美しい作品で何を達成したのだろうか。「無垢」の世界がその限界を乗り越えて夜へと進み、その途中で田園的牧歌に別れを告げている。それから夜が過ぎ去り、新たな永遠の一日の栄光を迎えてこの詩を終えている。他方、「夜」はいかなる意味でも和らいでいる作品ではない。無垢な生き物たちは、飢えゆえに獰猛化した猛禽類によって襲われ、殺戮されている。太陽が沈むにつれて若さと生命と平安が過ぎ去っていくことは、天使がすべての経緯に如何に多くの哀れみをかけようとも、避け難いことであり、死も必然である。同時に、この詩の外観は、妥協の余地なく「無垢」の詩人の姿を保っている。ここで提示されているヴィジョンは、清らかで愛溢れる来世への復活を秘めた「子羊」の力を示している。このヴィジョンは、ひとつの事実として扱われているばかりではなく（例えば、『無垢の歌』の「煙突掃除の少年」に含まれる社会的恐喝や、教会組織が「悲惨から天国を作っている」『経験の歌』の「煙突掃除の少年」に明らかにされている偽善性とは異なって）、夜の認知法を、「歓喜」に「微笑む」花のような月が見守っている肯定的なイメージに変容させている。この詩全体では、愛はすべての障

碍を克服し、すべての災難を良い結果に変えることが出来るという揺らぐことのない信頼と信念の表明である。

しかしもし彼らが恐ろしく突進したら、
天使たちは、とても注意深く、

この詩は特定のヴィジョン、想像上の天国へと連れて行ってくれる特定のヴィジョンへと誘ってくれる。そこでは獅子が「今、鳴いている子羊よ、／私はおまえのそばで横になって眠れるのだ」と語っている。ブレイクは、「夜」は死と来世の「無垢な」視点を表現していることに注目していると言える。つまり、詩人は、安眠することが出来る自分自身の安らぎの場を「求め」なければならない。この詩のパターンの中では、詩人を「物思いのない」巣に休む小鳥たちと併置しており、これが唯一であるという対立的ヴィジョンを、笛吹きと詩人が提供していることを思い起こさせている。「巣」に対する欲求に関する笛吹きの言葉をより深く解釈することは可能である。最後の2つの連で表現されているヴィジョンと信念は、笛吹きのための巣であると言える。これは死に勝る愛の最終的勝利を約束している。この信念は安堵感を与え、夜の危険に耐え、それを退ける一助となる。

作品「夜」には聖書における予言の言葉への言及で溢れている。特に、「イザヤ書」³からの反響が多く見られ、『新約聖書』の最後の書であり、世の終わりに関する寓意的な預言書である「ヨハネの黙示録」への言及が多い。「生命の川で洗われて」の一節は「ヨハネの黙示録」第22章の冒頭に登場する「命の川」への言及である。

天使はまた、神と子羊の玉座から流れ出て、水晶のように輝く命の水の川をわたしに見せた。川は、都の大通りの中央を流れ、その兩岸には命の木があって、年に12回実を結び、毎月実を実らせる。そして、その木の葉は諸国の民の病を治す。… もはや、夜はなく、ともし火の光も太陽の光も要らない。神である主が僕たちを照らし、彼らは世々限りなく統治するからである。(「ヨハネの黙示録」第22章、1, 2, 5節)

この「命の川」は「エゼキエル書」第47章にある予言の反復であるが、ブレイクの「夜」を理解しようとするここでの目的にとって、啓発的なのはこの詩と「ヨハネの黙示録」間に見られる広範にわたる符合である。まず、この詩の「不滅の日」は、「ヨハネの黙示録」第21章1節の「新しい天国」を光で照らし出している神の光明と一致している。その天国は、「新しい天国を受け継ぐために」ブレイクの「柔和な魂」を天使が集め、救われた魂が受け継いでいる。しかし、この詩では「命の川で洗われた」後、神というよりは獅子のたてがみから光が輝いているように思える点で、相違が見られる。そうして、永遠に「群れを守っている」のは、神というよりは獅子

自身なのである。

獅子が変容する際に、獅子に何が起こったのだろうか。獅子は、残酷な自然の法則に従い、無垢な生き物を殺戮するために「恐ろしく突進する」冷酷な猛禽類から変身し、天国における保護者、光を与えるもの、つまり神自身の役割を担っている。この詩はこの変身を象徴的に暗示している。獅子の目は「赤らんで」、血を求める本性を示唆しているが、無垢の生き物の死に続いて、「黄金の涙を流し」た後でその全身の色を変えている。その後には「黄金」が獅子の色となっている。変容したヴィジョンは責任重大なものであることをブレイクは示唆しており、この詩は神と肉食獣を同一視していることを大胆に示唆している。この詩での出来事は、(「哀れみ」の「黄金の涙」を流しているが) 神が異なる目を通して無垢の生き物を見ており、同時に読者は異なる目を通して神を見るように導かれているということである。かつては破壊者として神を恐れていたが、新しいヴィジョンによる啓示は、新しい視点から獅子である神を光と保護者として示しているのである。

最終連における獅子の心的状態はまたひとつの驚きである。獅子は自然の「飢え」である「獲物を求めて叫ぶ」自然の本能という重荷から解放されていることは明らかである。獅子は殺したいという欲求に駆られることなく、子羊のそばに横たわることが「今や」「出来る」ことに喜んでいる。この変化はキリストの特質に関わるものであり、その柔和さは獅子の怒りを払拭し、反省を促している(「汝の名を冠している方を思い／汝の後について草を食み涙している」)。「命の川」は子羊の血を連想させるのは「ヨハネの黙示録」の聖句にある。⁴しかし、ブレイクの詩が大胆にも示唆するところは、キリストの血が世界を贖うばかりでなく、神自身をも贖っているのである。ブレイクは神自身も贖罪を必要としていたと考えていたことを示唆している。神は残酷で血に飢えた「怒り」の猛獣であり、自分を救済するヴィジョンを獲得することが出来ない存在であった。

この詩の全体は認知法の問題を中心に展開している。ここではいくつかの異なる「ヴィジョン」が関わっており、これまで見てきたヴィジョンをまとめた一覧表は明快な理解に有益と思われる。

1. 「無垢」の世界の詩人(笛吹き)は夜の訪れとともに自らの限界に至っている。笛吹きは天使の世話に関しては現在形で語り、「新しい世界」に関しては未来形で語っている。
2. 獅子の「赤らんだ」目は充血して見えづらくなって、目の前の獲物しか見えていない。
3. 「黄金の涙」で洗われた(「泣いている」)獅子の目は、哀れみと悲しみを込めたまなざしを向けている。
4. 小鳥たちには何も見えない。小鳥たちは巣の中で「何も考えていない」。
5. 月は夜と出会い、夜に「微笑んでいる」。

全体として作品「夜」は明解な答えではなく、むしろ曖昧さを読者に提供している。選択可能な異なる視点から自分の視点を選ぶか、あるいはそのすべてを受け入れるかは読者に任されている。

この詩は自然の世界を提示しており、無垢の生き物が、残酷な捕食者の何気ない犠牲者となっている夕べと夜の「現世」を提示している。「現世」の天使たちはまったく影響力を持たず、夜が訪れると殺戮が広がっている。「現世」での「無垢な」ヴィジョンを持つ笛吹きを受け入れるか、愛が夜と死と怒りを克服すると予言している最後の2つの連の未来形の'shall'を受け入れるかどうかは、読者に任されている。これらの世界を結ぶブレイクの大胆な連結辞である獅子は両方の視点を蝕んでいる。自然の目は恐怖のあまり盲目となり、獅子の「真実」を目にすることが出来ずにいるのだろうか。あるいは愛溢れる獅子は幻想の産物で、恐怖に駆られた生き物を安心させるために創造された幻影なのだろうか。

作品「夜」は読者の解釈を導く上でこれ以上の方向性を与えてくれているわけではない。この詩は複雑な様式で信仰という難しい問題を読者に提示している。しかし、ブレイクの創造の厳密さ、つまり無垢の限界内に留めていることに注目すべきであろう。自然界と死は代償なしに提示されており、「天国」のヴィジョンは時制によって未来の別世界の中にしっかりと位置づけられている。この研究を続けると、この「無垢の」ヴィジョンの他の異形に出会うことになり、この難問に対する新たな異なる複数の窓を徐々に開示している。例えば、『無垢の歌』の「煙突掃除の少年」は「夜」よりも読者の反応にひとつの方向性を与えてくれる。しかし、次の章で明らかになるように、この事実は読者のジレンマを、容易なものにするのではなく、むしろ異質なものにしている。

これまで検討してきたこの『無垢の歌』の詩は、死を両面的な価値を持つ概念として扱っている。つまり、妥協の余地のない自然が描かれており、肉食獣が「恐ろしく突進する」までは天使も救世主も介入していない。そして、特定されていない未来の時点における別の世界での贖罪のヴィジョンが続き、その世界では優しさと涙と愛が勝利を収めているのである。⁵

「蠅」

『経験の歌』では、死が「蠅」のテーマであることは明らかである。

小さな蠅よ、
おまえの夏の遊びを
私の思想のない手が
叩きつぶした。

私もおまえのような
蠅ではないか。
それともおまえは
私のような人間ではないのか。

なぜなら私は踊って
飲んでそして歌う、
ある盲目の手が
私の翅を叩きおとすまで。

思想が生命であり
力が呼吸であるならば、
思想の欠如が
死であるならば、

その時、私は
幸福な蠅である、
私が生きていようと、
死んでいようと。

韻律上はこの詩は非常に単純である。1行には2つの弱強調からなる4音節があり、いくつかの行では最初の弱勢の音節が排除され、3音節となっている（'Am not I'や'Then am I'のように）。短縮された行は蠅が飛翔する一瞬の駆け出しを模倣しており、非常に短い言葉（単語の多くは1文字、2文字、3文字の単語でしかない）は、タイトルとなっている小さな昆虫を思い起こさせる。加えてこの詩における思想の瞬間は一瞬の瞬発力であり、一匹の蠅の飛翔とその命のように突然に方向を変えている。例えば、'A fly like thee'と'A man like me'や'If I live / Or if I die'に見られる思想の逆方向への転進を見ると明らかである。

しかし、「蠅」は単に細かい、素早い飛翔の動きを言葉と形式で見事にまとめた作品ではない。ある思想の突然の動きは死である。つまり、「払い除けられた」、「私の翅を払い」、「思想の欠落は死」、「もし私が死ぬなら」の句はすべて命が途切れる突然性を表している。このようにこの小さな詩には4つの死滅の瞬間がある。それぞれが各連の最後の一行に落ち着いており、それぞれが素早さと終結観を添えている。

この詩のテーマは死である。最初の連で詩人は一匹の蠅を殺し、それからその主題に関して相似的な思考を発展させている。まず詩人は自分を蠅に例えている（死は自分が蠅にしたと同じように、自分を「払い除ける」）。そして均衡を保つために詩人は蠅を自分に例えている（蠅は一人の個人であり、人間と同じように貴重な存在である）。この論理は容易に納得がいくものであるが、第四、第五連において詩人はその表現上は単純であるが、決して容易ではない一連の論理を展開している。

ブレイクは「思想は命である」と提案し、それからその理念を結論までつなげている。まずも

し「思想が命」なら、その反対も真である、つまり思想がなければ「死」である。次の展開はどうなるのだろうか。次にブレイクはこの前提をあたかも逆転させている（「命は思想である」と「死は思想がないことである」と）。この論理が、生きていると考えることは幸せな状態なので、ブレイクの主張「それで私は／幸せな蠅である」の基盤を提供している。もし死には思想がないのであれば、それは単なる空虚であり、そこで死における不幸の根拠もなくなる。これは十分納得のいく論理と思え、心地よい均衡のとれた知的な説得力を持っている。

この詩の様式は「幼児の歓喜」や「春」のような『無垢の歌』を思い起こさせるが、最終連の「それであれば私は／幸せな蠅だ」は、この詩は対立する詩を含む詩集の陽気さに属していると勘違いさせるかもしれない。しかし、これは誤った印象である。

真実は、この詩の語り手が提案している真実ほど単純ではないことを巧妙に示唆している。まず、「思想」という言葉は語り手自身が、自身が生きているときに「思想もなく」蠅を殺しているのでアイロニカルである。従って、この詩の冒頭に関わっている「思想の欠如が死である」という陳述には第二の意味があることになる。つまり思想がなければ死をもたすかも知れないが、必ずしも思想のない人の死ではない！実際、第三連の「盲目」という単語は思想性の欠如の意味であるに違いないし、その文脈では死自体は安易に破壊的なものとして記述されている。その同じ出来事の中で、詩人は恥じることなく死の思想なしに生きていることを認めている。「私は踊り／飲み、歌う／…するまで」。そこで無思想という概念にはいくつかの枝葉があり、それぞれには語り手の結論を正当化する単純な精神的活動の欠落というよりは、もっと道徳的には怪しい複線がある。

第二に、「もし、…ならば…」という最初の2つの連の論理的構造に読者は疑問を抱くことになる。何故なら語り手の論理は、前提を逆転させることに依存しているからである。陳述文は一方方向に限り真であるものなので、この様な論理が到達しうる誤謬に注意すべきである。例えば、次の2つの前提を調べてみよう。(1)「それは海である。それ故に濡れている」。(2)「それは濡れている。それ故に海である」。その効果は、この詩の外見的にきちんとした思想は考えれば考えるほど怪しいものとなってくることである。作品「蠅」の美しい形式は意図的にもろく出来ており、その言外の意味は語り手が望む以上の疑問を産み出す。その結果、語り手に対して批判的な立場を取るようになり、次の疑問を呈する。

この詩の語り手は何を達成したのだろうか？語り手は無害の蠅を冷酷に無神経に殺している。それから、死んだ蠅は幸せであると自分自身を納得させている。これは実に語り手にとっては好都合なことである。この詩の発言を心理学的に検討するならば、語り手は自分の罪を認めたくないで自己正当化している、劣悪で気楽な殺人者ということになる。

この語り手が手を抜いていることは何なのか？この人物は蠅を殺したことに対して後悔の念を抱いていないのである。語り手の「思想」とは無味乾燥な論理の練習であり、その目的は本来の道徳上の責任から自分の気持ちを遠ざけているように思える。この種の「思想」は「命」と同一

なのであろうか。

最後に、この詩の身も凍るような結論に注目したい。生死は問題ではない。どちらの状態でも「幸せ」なのである。しかしこの幸せはその命では登場人物が殺戮を犯し、踊り、飲み、歌っている単なる愚かしい意味のなさと、死の実際上の無意味さからなっているのである。そこで、「幸せ」という主張は空虚に響く。この詩の語り手が実際に明らかにしているのは、生死は同じように愚かしいので何の意味もないということである。『経験』の限定された破壊的な見解を見つめているのは、そのような論理の身の毛も凍りつくような「思想の欠如」の元であった。

作品「蠅」におけるもろい傷つき易い見方を採用した結果は、生死に関する無意味さに陥っているというものではなかった。その代わりに、自らの生死を自らの見方で無意味なものにしている語り手の見方の貧困さばかりが印象に残る。「眠りの塊から朝が起き上がる」ことを目にすることを拒否し、詩人の呼びかけにも拘らず光に眼を向けることを拒否している大地の堅固な絶望を思い出そう。「蠅」の語り手は、自分自身の限られた認知法に囚われているもう一人の人物なのである。人生は無意味である、しかし語り手は自分自身の無意味さを創造しており、自分の精神的エネルギーすべてを注いで維持しているのである。

命の浪費をテーマとしているもうひとつの作品は「天使」である。

「天使」

私はひとつの夢を見た！ その意味は何だろう。

私は未婚の女王で、
やさしい天使に守られていたのに、
愚かな悲しみが紛れる時はなかった！

私は夜も昼も泣いた、
すると彼は私の涙をぬぐってくれた。
私は昼も夜も泣いていて
私の心の歓びを彼から隠した。

そこで彼は翼に乗って逃げた。
やがて朝が薔薇の赤に恥らった。
私は涙を乾かし私の恐怖に武装させた、
一万の盾と槍でもって。

そのうち天使がまたやって来た、
私は武装していたので、彼は来ても無駄だった。
というのは青春の時は過ぎ去り
私の頭は白髪になっていたから。

この詩でブレイクは強弱調と弱強調の詩行を交互に使っているが、その効果は同じような予想し易いリズムとなっており、全体的に見られる完全な二行連句の押韻によってその効果は高められている。韻律が不規則な箇所が2箇所(強強格)あるが、両方でブレイクは2つの音節に強勢をおいて、余分の重みを生み出し、この詩のペースを落としている。この2つの瞬間にまず語り手の防衛的な武具(‘With ten thousand…’)を強調しており、次に高齢への重々しい移行(‘And grey hairs were…’)を強調している。

この詩の内容は何だろう。この章でこれまで見てきた2つの詩とは異なり、この詩は自明な物語ではない。この詩の語り手は夢の中で天使に伴われた処女の女王と思われる。大きい悲しみと恐怖が描かれ、天使は立ち去って戻ってくる。しかし、女王は老いてしまっている。『経験の歌』への序詩と同じように、一度読むと重要性を感じ取ることは出来るが、その詩の中の出来事の理由を解明するにはより詳細に検討しなければならない。この時点では、この登場人物の特徴を掴むことが役に立つだろう。そうすればこの物語に心理学的な洞察を与えることが出来る。

「処女王女」の人物はこの作品で明確な心理学上の経緯を辿っている。女王は「昼も夜も」泣くことで始まり、「夜も昼も」泣き続けている。しかし、女王が自分の「心の歓び」を「隠した」と語るとき、彼女の悲しみには存在感を感じざるを得ない。天使が去ると女王は泣きやむ(「涙をぬぐった」)。この時点で女王は無防備な状態にあり、結果として人生に対する対応を変えることになる。そこで女王は恐れを抱き、盾と槍で自分の恐怖を「武装」する。第1章で『無垢と経験の歌』では恐怖は大半の悪の根源であることに注目したが、この詩もその例外ではない。明らかにこの「処女王女」は敵意に溢れた自己防衛的な個人になり、無感覚な殻の中で偽善的で陰しい保身に走る個人となる。天使が戻ると、「私は武装していたので、彼は来ても無駄だった」とあるように、彼女の心に触れることは出来ないことを明白に語っている。そして王女は天使の申し出を拒絶した。最後にこの詩は王女がこの不毛の拒絶の中で老いていっていることを語っている。

「処女王女」のこの物語は歪曲された情緒を物語っている。彼女の変わらぬ悲しみは関心を求める訴えであり、天使は彼女を慰めることで応えている(「すると彼は私の涙をぬぐってくれた」)。これが王女が求める気遣いであり、彼女は天使を自分の感情の要求に彼を隷属させることで得ている秘密の満足感を天使から隠している。王女は結局天使が「逃げる」まで泣き続けている。この言葉は天使が単にその場を立ち去る以上のことを示唆している。つまり、天使は彼女の所有欲から逃れざるを得ない、つまり、彼は単に逃避していることを暗示している。

王女の存在の第2段階では、処女王女は自分の感情を違ったやり方で歪めている。この度は相手の関心に訴える代わりに、彼女は自分が傷ついてきたという隠蔽してきた事実を守るために、冷淡で敵意溢れる人物になっている。両方の段階で、自分自身に対する彼女の不誠実さゆえに関係を築くことが出来なくなっていた。ブレイクが当然の境界領域という現実を強調するとき、王女の人生の悲しい不毛さがこの詩の最後に伝えられている。「女王」であり、守護している「天使」がいるという「夢」は、詩の中にある自己中心的な幻想のように突然、雲散霧消している。厳しい自然の現実、王女が自分の当たり前前の人生を浪費していることを強調している。

というのは青春の時は過ぎ去り
私の頭は白髪になっていたから。

この詩におけるブレイクの攻撃目標は、抑圧であり、否定であり、所有欲であり、自衛的な恐怖であり、その結果生まれる歪曲と不自然な虚言である。この最後の二行連句における喪失感と消耗意識は、彼女が生きてきた偽りの「夢」から目覚め、自分の老齢と向き合うとき、突然その視点を転換し、突然の苦しい認識のような働きをしている。

しかし、再びブレイクは偽りの認識に焦点を当てている。『無垢と経験の歌』のテーマとしての自然の理解を培っていくにつれて、自然はそれぞれの詩の変化する視点の影で、妥協を許さない恒常的な存在であることに気づく。従って、「夜」では危険と死は天使の哀れみにも拘らず確実なものであり、「蠅」では自分の人生で意識しているのか、「思想がない」かに関わらず、死が確実なものである。また、「天使」では自分の人生を空費する一方でいかなる幻想を維持していても、時間と老齢が確実なものである。その時、自然は陰気で変わらぬテーマとしてその姿を現し始め、さまざまな詩は、その現実を眺め、あるいは歪めようとしている多様なヴィジョンと夢を題材としている。

「失われた少年」と「見つかった少年」

次の一連の作品は自然の神秘性と危険と、そこに潜む人を欺く外観に焦点を当てている。その作品群は「失われた」詩と「見つかった」詩であり、『無垢の歌』にある2つの作品を検討することから始めよう。次の2つの詩は、連結しており、ひとつの物語を語っているので一緒に取り上げることになる。

「失われた少年」

「父さん、父さん、どこに行くの。」

ああ、そんなに速く歩かないで。
父さん、話して、この小さなぼくに何か話して、
そうしないと迷子になっちゃうよ」

夜は暗く、父さんはいなかった。
子どもは露でぬれた。
泥沼は深く、子どもは泣いた。
そして夜霧は飛び去った。

「見つかった少年」

狐火にたぶらかされ
淋しい沼地に迷っていた少年は
泣き出した。しかし常にそばにいる神は
白衣をまもって父さんのように現れた。

神は小さい子に口づけし、手をとって
母さんのもとへ連れていった。
悲しみに顔色あおざめ、淋しい谷間をさまよい、
泣きながらわが子をさがしていた母さんのもとへ。

簡単なりズムと明白な押韻を持つ、2つの4行連からなる上記の2つの詩の外見上の単純さは、弱強格と強弱弱格を入れ替える実に複雑な韻律からブレイクが作り出した印象である。この詩の強弱弱格における強勢をおかない音節（例えば、‘The little boy lost in the’）の敏捷性は、それに続く弱強格に更なる効果を与えている。音読する際に読者の期待感に働きかけている。つまり、読者はそれぞれの強勢の間に、2つの連続する強勢のない音節を期待することになる。聞き取る上で考えると、‘di-dum-diddy-dum…ect.’というリズムを耳にすると、‘dum’が来るたびに‘diddy’を期待するようになる。期待通りの韻律がないと自動的に調整するようになる。つまり、期待していた音節がないと、それを補填するために強勢に音節を加えるようになる。このように、弱強格の強勢をおかれた音節は、普通以上に長く保ち響かせるようになる。ブレイクはこの効果を使って、これらの詩における音声や単語に更なる悲しげな共鳴を加えている。特に「失われた少年」の3行目にある2番目の‘speak’を見てみると、子どもの悲しげな叫びに音声的価値、つまり絶望感を加えている。「見つかった少年」では‘Lonely fen’の悲しげな響きと、7行目の‘Who in sorrow pale, thro’ the lonely dale’における母親の心痛と淋しげな背景におかれた強勢に着目し

てみよう。

この2つの詩の内容は比較的紛れが少ないものとなっている。少年は「狐火」、父親の幻影であり、少年に道を迷わせた鬼火についてゆく。この詩は少年を「無垢の世界」の外におき、少年は「経験の世界」の夜に足を踏み入れているので、「父さんがいない」ことと「夜は暗い」ことを明確に語っている。また、少年は、一般的には「経験の世界」の物質主義に毒された状態の象徴である「夜の露に濡れ」ていたと語っている。この詩では親の思いやりの誤った幻想がその子どもを欺いてしまい、その子を孤独と悲惨の状態に陥らせている。これは妥協の余地のない詩であり、「狐火」による残酷な欺瞞の物語を語っている。重々しい樹木が2本、右手に立っており、中央には両腕を広げた少年が、その図版の左手に向かって走っている。そこには不気味な星の形をした黄色い光は、その中心にグロテスクで鋭い白い舌状の形をしており、その図版から消えようとしている偽りの「狐火」、「鬼火」を表している。全体的なデザインは傾いた角度に設定されており、少年はその樹木に押されて、明らかに転びそうな格好で、下り坂を走っている。

ブレイクは次の詩を別個の詩として配置することを選択した。そうすることで変更された視点を強調している。2番目の詩では神が現れ、少年とその母親が再会し、その結果、最後にはすべてが善しとされている。しかし、幸せな結末に疑念を投げかけている2つの要素がこの詩には含まれている。最初に、ブレイクは神が「白衣をまとって父さんのように」現れたという直喩を挿入している。詩の内容に実際の父親の姿は未だなく、その直喩は神が父親の姿を取っているという納得しがたいことを仄めかしているが、結局子どもは未だに惑わされた状態におかれている。次に、「悲しみに顔色あおざめ、淋しい谷間をさまよい、／泣きながらわが子をさがしていた」母親の姿は、幸せな結末とは相容れない雰囲気を与える恐怖、喪失、悲嘆の調子で終わっている。ここには「経験の世界」の「見つかった少女」に現れるライカの両親が抱いた青白い恐怖のかすかな兆候が見られる。「青白い」母親の恐怖は、「経験の世界」の「乳母の歌」とも執拗に響きあっている。

子どもたちの声が緑の野原で聞こえ、
ささやきが谷にあるとき、
私の青春の日々が心のなかで甦り、
私の顔は青ざめて血の気が失せる。

それからブレイクはいくつかの詩の中で「青ざめた悲しみ」や「谷間のささやき」という不吉な表現を用いて、「経験の世界」とその露で覆われた夜の恐怖を伝えている。『無垢と経験の歌』の多くの作品で、この恐怖が過剰な自己防衛と沈滞へ、あるいは、子どもが自然な健康的で制約を受けない成人への成長を妨げている抑圧的な法律へと繋がっている（特に「愛の園」と第3章の議論を参照）。『セルの書』の議論の際に、この人工的に延長された無垢の課題について立ち戻る

ことになる。

「見つかった少年」のデザインは最初の詩のそれとは対照的で、平坦でバランスの取れたものとなっている。左手の2本の樹木と右手の1本の樹木が不完全なアーチを形成し、その中で二人の人物が光輪を輝かしながら観る者に向かって歩いている。その二人は子どもと白い衣をまとった「父親のような…神」であり、手を綱いて森から出てきている。この作品でこれまで見てきた疑問点が、このデザインの中でも仄めかされている。というのは「神」の姿が明らかに女性的である。多分、ブレイクはこの詩の恐怖を抱いたヴィジョンに現れた神格的人物は、子どもを癒し、その子を「無垢の世界」へ連れ戻しているが、同時に、親の働きを果たしていることを暗示しているのだろう。もちろん、このデザインは神が父親の似姿をしていること、子どもが見た真実に更なる疑問を投げかけている。

取り合えず、ブレイクは信念の選択を読者に委ねていることに注目しておこう。最初の詩では神の誤った幻影を露骨に記している。一方、2番目の詩では両面価値的な、意味が理解しがたいもの、神の一種の「真の幻影」を描いている。母親は子どもを見つけ、母親の恐怖に溢れた保護の元に戻る。超自然的な保護に対する信頼を寄せている「無垢の世界」の境界をまだ越えているわけではない。同時に、「無垢の世界」の幻惑された、脅かされた世界ではすべてが正されているわけではない。

特に、自然に関する信念の選択は読者に任されている。世界は「淋しい谷間」で、「沼は深く」「暗い」夜に「父さんはいない」所なのだろうか。あるいは、世界は悩みを癒し、家族を再び結び付けてくれる、「白い衣をまとった父さんのような神」の庇護の下にあるのだろうか。

「失われた少女」と「見つかった少女」

次の2つの作品は『経験の歌』の「失われた少女」と「見つかった少女」である。この2つの詩は初版では『無垢の歌』に含まれていたが、後の版で『経験の歌』に移された。ここでもその内容から見ても、この詩行の原テキストに従ってこの2つの詩を「経験の世界」に位置づけたい。

「失われた少女」

私は予見する
みらいにおいて
大地は眠りより目覚め
(この文を深く刻みつけよ)

立ち上がり、探し求めるだろう

優しい創造主を。
そして荒野も
なごやかな園となろう。

真夏の盛りが
衰えることがない
南の国に
うるわしいライカは横たわっていた。

七つの夏を
うるわしいライカは数えていた。
野の鳥たちの歌を聞きながら
長いあいだライカはさまよった。

「こちよい眠りよ、
この木陰にいる私に訪れよ。
父さん、母さん、泣いているの、
どこでライカは眠っているのか、と。

あなたのいとし子は
荒野のなかで迷っています。
どうしてライカは眠れましょう、
母さんが泣いているなら。

母さんの胸が痛むなら
ライカを起こして下さい。
母さんが眠るなら
ライカは泣きません。

機嫌の悪い、機嫌の悪い夜よ、
この輝く荒野の上に
あなたの月を昇らせておくれ、
私が目を閉じているあいだ」

身を横たえてライカが眠っていると
その間に猛獣たちが
深い洞窟から出てきて
眠る少女を見た。

王者のような獅子は立って
処女を眺め
この神聖にされた土地の上を
とび跳ね回った。

豹や虎も踊る
寝ているライカのまわりで。
老いた獅子が
金色のたてがみを垂れ、

処女の胸をなめ
彼女の頸の上に
焰のような眼から
ルビーの涙を流した。

連れの牝獅子が
薄い着物を脱がせ
裸体のまま眠れる少女を
洞窟のなかまで運んだ。

「見つかった少女」

夜もすがら悲しみながら
ライカの両親は行く
深い谷を超え
荒野は泣いている。

疲れ、悲しみにひしがれ
呻くあまり声もしわがれ

七日間手を取り合い
父母は荒野の道をたどった。

七つの夜を彼らは
深い木陰で眠り
いとしい我が子が荒野で
飢えている夢を見た。

顔は青ざめ、道なき道を
幻の我が子の姿はさ迷う、
飢え、泣きながら、弱々しく
うつろな悲しげな叫びをあげて。

不安のあまり立ち上がり
震えながら母親は急いで進む、
哀しみに疲れた足を引きずって。
彼女はもう歩けなくなった。

ひどい悲しみを身にまとして
父は両腕に母をささえた。
すると彼らの道の前に、
一頭の獅子がうずくまっていた。

引き返すことはできなかった。
たちまち獅子の重いたてがみが
両親を地にひれ伏させた。
それから獅子はゆっくりとあたりを歩いた。

獅子は獲物の匂いを嗅いだが、
両親の恐れはうすらいだ、
獅子が彼らの手をなめて、
じっとそこに立っているだけだったので。

深い驚きに満たされて、

両親は獅子の目を見た。
すると不思議や、目がとらえたのは
黄金に身を鎧うひとつの霊。

獅子の頭には王冠があり
その両肩からは
黄金の髪が垂れていた。
両親の心配はすべてなくなった。

獅子は言う「私について来なさい。
少女のために泣くでない。
私の宮殿の奥深くに
ライカは眠っている」と。

そこで二人は幻が
導くところについて行った。
そして荒々しい虎に囲まれて
眠っている我が子を見た。

今日に至るまで彼らは
淋しい谷間に住む。
狼の叫びも恐れず
獅子の吼え声も恐れずに。

これらの詩では大きなリズムの乱れもなく弱強格と強弱格を入れ替えながら使っている。若干の不規則な箇所が見られるが、最も顕著な変則のリズムは「見つかった少女」の第2連に見られる 'Arm in arm seven days' であり、'seven' に置かれた強勢は、多分両親が探している時間の長さを伝えているのだろう。それぞれ短い詩行に規則正しく置かれた3つの強勢と、独立した表現として大半の詩行を配置しているブレイクの技法は、この2つの詩に共通する単純な雰囲気を醸し出している。これまでいくつかの作品でこのような明白な平易なリズムに注目してきた。ブレイクによる単純な詩脚の無理のない活用の仕方は、これらの詩作品自体が単純な内容であるという印象を与えていると言うことも出来るだろう。このような詩脚は読者に「ここにはなんら複雑なものはありません、ご自分で確認して下さい」と言っているように思える。

物語は単刀直入な内容になっている。この2つの詩の「少女」ライカは実際に道に迷っている

わけではない。彼女は両親が苦しんでいる経験に対して、単に恐怖感を抱いていないのである。ライカは自然の恩寵を信頼しており、抑制要因に悩むことなく、自分の自然な本能のままに行動し、何の危害にも遭遇していない。一方、両親は「いとしい我が子が荒野で／飢えている夢を」みており、(ここでは「道なき道」や野獣たちで表現されている)自然自体を恐れるあまり、両親は「想像上のイメージ」に隷属している。2つの詩の最後の部分では、獅子が自然の彼らとは異なる認識を提示する役割を果たしている。つまり、圧倒的でありつつ、野生的であり、同時に、実に愛情に溢れている自然の姿を表している。

また、この2つの詩から導き出される結論に関しては疑問の余地はない。ライカの両親がこれほど恐怖感を抱くのは間違っており、ライカ自身は賢明にも恐怖心なしに自分の本能に従っているのである。両親は、自分の娘から、過剰な心配の無用さを学ばなければならない。両親が取り付かされている自然に対する恐怖感は実は幻想であって、自分自身の恐怖感が作り上げた「空想上のイメージ」に過ぎないことを学ぶ必要がある。両親はこのような恐怖を克服するようになり、野獣と娘と共に幸せに生活する姿でこの詩を終えている。ブレイクは最後の二行連句で、両親が偽りの恐怖感を克服したことを強調している。

狼の叫びも恐れず
獅子の吼え声も恐れずに。

これは心に訴える昔ながらの「メッセージ」である。十代の若者が何世代にも渡って語ってきた声が、この詩を通して聞こえてくる。つまり、両親に自分たちを信頼し、自由裁量を与えるようにと、子ども自身にもっと責任を持たせるようにと哀願している声が聞こえる。

この2つの詩は、『無垢と経験の歌』における自然のテーマにどう貢献しているのだろうか。明らかに自然界に関する対立的な見解がここでは表明されている。つまり、両親の恐怖感とライカ自身の信頼できる本能である。ブレイクはこの2つの視点を併置することでこの対立関係を増幅しており、この緊張関係はそれぞれの詩で決定的な瞬間を迎えている。

「失われた少女」の第五連から第八連にかけて、ライカの信頼感と両親の恐怖感の対立関係について語っている。ライカの視点から見ると、「甘美な眠り」は歓迎すべきものであり、母親の不安に対する気がかりもなければ他に悩みの種は何もない。

もし母が眠っているなら
ライカは涙することはない。

この対立の一方の側がライカの見方と入れ替わっている。両親は娘が安心して眠りにについていることを想像できないでいるし、そのことを3度語っている(「ライカはどこで眠ることが出来よ

う]、「ライカはどうして眠ることが出来よう」、「それではライカの目を覚まそう」)。しかし、自分の娘への心配は次第に自己中心的なものとなり、疑いもなく感情的な恫喝となっている。両親の考え方の最初の表現は率直な不信感である。つまり、両親の見るところ、どこにも安全な場所はなかった。2回目に心配するときには、両親はライカの状態と母親の状態を結び付けて、「もし母親が涙しているなら」と語っている。このことは道徳的な処方箋を導入していることになる。ライカは心配の種であるべきなのである。これはライカが直面している危険ではなく、母親の苦悩によって正当化されていることに気づく。両親の見解の3回目となる最後の表明は、「それではライカの目を覚まそう」という命令文の形式で与えられている。ここでブレイクは恐怖が、高圧的な姿勢に変容する様子を読者に明らかにしている。両親の自然に対する恐怖が、自らをまったく非理性的な言動に駆り立てていることに注目しよう。両親は自分の娘に不幸せになるように強いている、単に彼ら自身が不幸せな故に。

第八連でこの葛藤は解消されている。最初の一行は両親の見解をなぞり、それは形容詞句「しかめっ面をして」という表現を重ねることで強調されていることをブレイクは暗示している。しかし、2行目における「明るい」は一種の驚きの表現であり、ライカの人を寄せ付けないような環境が変容を始め、この詩の残りの詩行を占めている肯定的な認識への道を拓いている。この連の最後の二行連句はライカの声そのものであり、両親が恐れている夜も含めて自然全体を受け入れている声である。

あなたの月を昇らせておくれ、
私が目を閉じているあいだ

その時ライカは両親を否定していることになる。少女は母親の涙にも拘らず自然を信頼して身を任す決断をしている。ブレイクは両親が先行する連で使用した同じ命令形である‘Let’を使うことによって、両親に対する少女の反論を強調している。

これまで見てきた2つの連では、自然に関する2つの対立的視点が5回入れ替わり、両親からの感情的恫喝の圧力を強調し、ライカが最後に眠りにつくときの解放感へとその緊張を高めている。また、この詩に突然に光明を導き入れる「明るい」という単語の効果に注目すべきである。この時点まで何の色彩も光もなかったが、詩の最後に獅子が輝いている「金色」、「焰」、「ルビー色」は、突然に現れた単語「明るい」に呼応している。その言葉は自然に対する両親とライカの態度の中間に、突然の光明、あるいは啓示のように立ちはだかっている。これはこの詩の転回点を示す言葉と言えらる。

「見つかった少女」では、両親の偽りの恐怖と「真の」自然との葛藤は、第六連から第十連にかけて発生している。両親の視点の進展は、「うずくまる獅子」に出会った瞬間から始まっている。この出来事は「戻ることは出来なかった」という明らかに両親の恐れを抱いた見解から始まって

いることに注目しよう。しかし、両親は地面にひれ伏しているのは獅子の「重いたてがみ」であると感じているので、ブレイクはこの連で一種の不条理性を導入している。両親の恐怖がその場面を支配し、彼らは獅子の脅威やその牙ではなく、その存在が脅威であると信じ、ひれ伏している。具体的に言うと、両親を圧倒しているのは獅子の男性的エネルギー、彼のたてがみの誇示行為なのである。

獅子は両親の期待通りの行動を続けている。獅子は二人の辺りを歩き、匂いを嗅いでいる。そして食べられると思っているので、「獅子はゆっくり辺りを歩いた／獅子は獲物の匂いを嗅いだ」と彼らの立場で描写されている。この詩では、獅子が親たちの手をなめるという啓示の瞬間に視点を変えはしないが、両親の見解を拡大しているといえる。両親がこの啓示の瞬間を体験するにつれて、二人は「深い驚きに満たされて」、「不思議に思っている」。獅子は「黄金の鎧をまとうひとつの霊」に変身し、王冠を頭に戴き、肩には黄金の髪が垂れていた。両親が「獅子の目を見る」と突然に獅子の真の霊の姿が明らかになる。両方の詩で重要な瞬間が、視覚と光の強調を伴って訪れる。

ライカの両親にその姿を現した「黄金の鎧をまとうひとつの霊」は、真理のヴィジョンであることは疑いの余地のないところであり、この真理は自らの恐怖心の故に両親からそれまで隠されていたのだ。その詩の後続の詩行では「王のような」獅子は人を惑わす幻想ではないことを確認している。家族は再会し、詩の最後では恐怖感を抱くことなく野生のままの自然の中で生活している。従って、この詩における2種類の解釈する「悟り」を峻別しなければならない。

まず両親の見た「ライカの詩の夢」があり、それは「幻の我が子の姿」である。このような「予見」では、獅子が非常に恐怖心に駆られ、両親はその「たてがみ」に圧倒され、食べられてしまうと信じ込んでいる。第2の解釈する「予見」は「黄金の鎧をまとうひとつの霊」としての獅子のヴィジョンである。ブレイクは「ヴィジョン」という言葉でこの見方に威厳を与えている。そのヴィジョンは誤魔化ではなく真理を明らかにしていることは分かっているが、両親の恐怖というよりは想像力のない真理に過ぎない。文字通り両親が付いて行っているのは王様ではなく獅子なのである。この詩の最後では字義上の自然が継続している。両親は「荒々しい虎に囲まれて／眠っている我が子を」見て、「狼の叫びも恐れず／獅子の吼え声に」恐怖感を持っていない。

そこでこの詩は、この獅子は一頭の獅子ではないと信ずるようには求めているわけではない。そうではなく、もし「ヴィジョンに富む」目で見ると、獅子は「黄金の鎧をまとうひとつの霊」であると信ずることを求めている。このヴィジョンに富んだ見方は、ブレイクの詩においては一層洞察力に富んだ視点なのである。実に多くの誤った視点が『無垢と経験の歌』では表現され、実に多くの見解と真の想像力に富んだ「ヴィジョン」とを見分けることは困難なので、初めて読む読者にとっては困惑の原因となる。しかし、ヴィジョンに富んだ目はブレイクの理念の理解には決定的に重要であるので、他の詩の分析に進む前にこの点についてももう少し詳述しておきたい。

友人のトーマス・バットに宛てた手紙の中の詩で、ブレイクはフェルパムで暮らしていた時に

経験したと主張するひとつのヴィジョンを説明している。

我が友バツツに私は書き送る
私の最初の光の幻を、
黄色の砂の上に坐っていた時の。
太陽は彼の荘嚴な光の矢を
天の高い流れから
放っていた。
海を越えて、陸を越えて
私の眼は広がって行った
あらゆる心労から離れて
空気の中へ、
欲望から遠く
火の中へ。
天の山々を飾っていると、
輝く片々となって
光の宝石だまは
はっきりとそして明るく光った。
驚きそして恐れて
私は一つ一つの片々を見つめた。
仰天した、驚愕した、
一片一片が人間であった
人の姿をしていたのだ。(1800年10月2日付け)⁶

この解説の中でブレイクは海岸で見た美しい、光輝溢れる朝の情景を伝えている。しかし、一層重要な「予見」がブレイクにひらめいた瞬間の有様を説明するために「私の目が拡大した」という表現を含めている。しかしながら、彼の「ヴィジョン」の2つの特徴を記憶に留めることが重要である。ブレイクは太陽光線の微片に焦点を当てており、彼が文字通り目にしているものを意識していることに注目しなければならない。つまり、ブレイクは「私はひとつひとつの光の一片を凝視していた」ことを明らかにしている。ひとつひとつの光の一片にヴィジョン豊かな姿を見出した時、ブレイク自身は驚き、驚愕している、つまり、正にライカの両親が抱いた「深い驚き」と同じなのである。従って、ブレイクのヴィジョンの最初の重要な特徴は、光の一片を見失っていないことである。ブレイクはその経験を通じてその本質を知ったのである。

次に、光の一片、つまり人間の姿は次のようにブレイクに語りかけているようである。

.....一粒一粒の砂は、
 一つ残らずの地上の砂は、
 一つ一つの岩そして一つ一つの丘は、
 一つ一つの泉そして小川は、
 一本一本の草そして一本一本の木は、
 山、丘、地そして海は、
 雲、流星そして星は、
 遠くから見ると人間なのだ..... (1800年、10月2日付け)⁷

この言葉は哲学的声明である。自然のすべては生きており、自然のあらゆる極少の存在はそれぞれ生きており、意識を持っている。そのような表明は、ワーズワースの提案である自然の事物は神の意志を表明し⁸、ジェラルド・マンリー・ポプキンスの言う聖トマス・アクイナスの「個性化の原則」と同じように⁹、ロマン派的思想の伝統の流れを汲むことになるだろう。ここでは哲学的な込み入った事情には踏み込もうとは思わないが、ブレイクと汎神論、ブレイクの個性の概念とホプキンの個性を対比したいと思う。記憶に留めて置くべき重要な点は、ブレイクの「ヴィジョン」には明白で合理的な意味があるということだ。「ヴィジョン」について考えると、ブレイクのヴィジョンは決して矛盾していないし、狂っていないことに気づくことになる。それは繋がってひとつの統合された思想的にも深遠な世界観となる。

上記の2点を記憶しておくことは決定的に重要である。ブレイクは彼自身の時代にあっては変人扱いされていたし、彼の著作は非常に奇異なものであり、衝撃的であった。結局ブレイクは社会的にも政治的にも破壊分子的存在であった。次の章ではブレイクの政治的見解が彼の時代ばかりでなく、20世紀を通して体制からの攻撃に晒されてきた。例えば、実質的にブレイクの時代と同じ政治体制が、マカーシー議員の1950年代のアメリカにおける赤狩りの標的であったし、1980年代初期の英国におけるサッチャー首相の反組合、反社会主義の議論の標的であった。

ブレイクはまた率直な男だったし、彼には生き生きとしたアイロニーと遊び心があった。ブレイクは素朴な心の持ち主を挑発することを好んでいた。つまり、ブレイクは奇異に振舞うことで人々をからかうのも楽しんでた。¹⁰そこで多くの人々がブレイクは気が狂っていたと信じている。しかし、もし上述の2点、つまり、ブレイクは現実を見失ったことはなかったし、彼の理念はいつも正当化され論理的に整合性があることを忘れなければ、ブレイクの語ることを、単なる「ヴィジョン」にすぎない、あるいは彼は「狂っていた」といって否定する過ちを犯す心配はない。

トーマス・バットへの別の手紙では、もうひとつの詩がブレイクの「ヴィジョン豊かな」予見の概念の正当性と重要性を確認している。当初はブレイクのヴィジョンは普通の予見とは異なる」と指摘している。

.....そして私の道の前では
しかめ面のアザミが一本私の滞留を哀願している。
他の人にはつまらぬものに見えるものも
私を笑みでまたは涙でいっぱい満たすのだ。
二重に像を私の眼は見るからだ、
そして二重の像は常に私と共にあるのだ。
私の内なる眼にはそれは灰色の一老人なのだ。
私の外なる眼には、私の道をさえぎる一本のアザミなのだ。(1802年11月22日付け)¹¹

明らかにブレイクはこれはアザミの花であることを文字通り確信しており、同時にその花に一層重要な意義を見出している。そして、この詩の残りの部分でブレイク自身の創造した寓意へと発展させている。明らかにアザミの花の寓意的、隠喩的意味は「白髪の老人」としての意味である。そしてこれは、ブレイクが自からの「内なる眼」で見たものである。この詩の後半で、ブレイクは自然の現実を見失うことは無意味であることを指摘している。つまり、「ヴィジョン」の上のレベルを認知するにつれて、以前の洞察を廃棄することはない。そうするならば、単純で物質的対象のみしか認知できないよう畏に陥っていたときのように、「ヴィジョン」における同じ狭量な限定された見方に陥るという罪を犯すことになる。ブレイクは対象に対する単純な科学的な評価や分類は嫌っており、彼の「ヴィジョン」は多面的であり、常に拡大を続け、単なる自然科学のような「単一」の「ヴィジョン」では決してないと主張していた。

今私は四重の像を見ている。
そして四重の像が私に与えられたのだ。
私が歓喜の頂点にある時それは四重だ
そして柔らかなビューラの夜では三重
そして常に二重だ。神よ我らを守り給え
単一の像とニュートンの眠りから！ (1802年11月22日付け)¹²

ここでは「四重の」、「三重の」、「ビューラ」¹³という言葉には深入りはしないでおこう。重要な点は「単一のヴィジョン」に対してブレイクが表明していた侮蔑感である。ブレイクの見解では、その見方は世界を単なる物理的な法則に還元しているのである。従って、ブレイクはその見方を「ニュートンの眠り」¹⁴と呼んでいる。

「見つかった少女」の獅子は獅子であると同時に「黄金の鎧をまとった霊」でもある。ライカの両親はより高次の認識のレベルに到達している。ふたりはブレイクが言う「2重の」ヴィジョンで見えるようになり始めている。この高次の状態では、恐怖によって限定されていた認識であ

る「単一のヴィジョン」では不可能であった、自然に対するより鮮明な理解力を持っている。自然の野生的で強力な生き物は素晴らしく、輝き、力強い存在である、獅子のように。ライカの両親はこのような自然の猛獣は敵対的存在ではなく、単に力強い存在であることを今や理解しているのである。自然のエネルギーに対する両親の反応はもう恐怖感ではなく、驚嘆なのである。

ブレイクの詩は類似した、もっと個別的なメッセージを同時に示唆している。牝獅子が「裸体の少女」を洞窟に連れてゆく前に、ライカの「薄い着物を脱がせ」たことに注目したい。このことは、ライカは両親のしつけという薄い衣を、まず脱ぎ捨てなければならなかったことを示唆している。これは象徴的に、少女が両親から獲得していた自分の裸体の美に関する恥じらいを脱ぎ捨てている。その恐怖に囚われている両親を圧倒しているのは獅子の男性性の提示、つまり、たてがみであることにも注目したい。このようにこの詩は性的解放の必要性を暗示しており、ライカの両親が恐れている自然のエネルギーは、性的エネルギーであることを示唆している。ここでもブレイクの攻撃目標は、恥辱感、嫌悪感、恐怖感を生み出す上品ぶった性に対する姿勢である。ブレイクは自然なセクシュアリティは強烈で素晴らしいものであると主張している。それはこの2つの詩の最後の詩行を覆っている「黄金」のように輝いている。

ここで「失われた少女」の冒頭の連についての検討に入ることが出来る。ここで『経験の歌』の文脈の中でライカの物語を明白に語っており、二つの詩が表しているヴィジョンの特質を具体的に示している。まず、ライカの物語は「未来」に設定され、「経験の世界」の詩人はその話を「予言的」とであると捉えている。これは「経験の世界」の現在の時間ではなく、その状態を超越した時間である。この点を強調するために、ブレイクはこの物語を「序の歌」と「大地の答え」によって位置づけている。というのは「経験の世界」の現在においては未だに恐怖に支配され、元の状態に「帰り」、明るくなる朝に眼を向けることを拒んでいることを思い出そう。少女は絶望の虜となっている。しかし、「失われた少女」では経験の詩人は、大地は「立ち上がり、探し求めるだろう／優しい創造主を」、そこでその「眠り」という「この深い一文を」投げ捨てるように(「予見的に」)主張している。この詩の最初の部分である最後の二行連句では、次に読み取る変容について語っている。

そして荒れ野も
なごやかな園となろう。

この二行には慣れ親しんできた見方を惑わせる効果がある。自然は完全に姿を変えると、ブレイクは主張しているように思える。実際に読者は突然、大地の見解に晒されることになる。自然自体は変わっていないのかもしれない。しかし、ブレイクは大地が「荒れ野」として認識している限りは、それが少女の現実なのであることの意味を求めているといえる。そこで、少女の見解から新しい現実(「なごやかな園」)が突然出現することになる。ブレイクの認識上の突然の転換は、

そのことに気づいていない読者を驚かせることになる。その突然の転換はヴィジョンの複雑さと多様性を強調している。

ライカの2つの詩は、経験の詩人（「現在，過去，未来を見ている」）が見えるようになるヴィジョンから生まれたのである。しかし、「経験の世界」の他の住民にはこのヴィジョンを見ることはできない、何故ならそれは「未来」の「予言的な」ヴィジョンであるのだから。

「子羊」

ここで「子羊」と「虎」，「無垢の世界」と「経験の世界」における自然の概念を定義する上で有効な対立的な2作品に取り組む用意が整ったといえる。「子羊」は次のような作品である。

子羊よ、だれがおまえをつくったの。
だれがおまえをつくったのか知ってるの。
おまえに生命を与え、川のそばや
牧場で、おまえに草を食べさせ、
喜びの着物、ふわふわして輝く
いちばん柔らかな着物を与え、
どの谷間をも喜びで満たす
そんなにやさしい声をおまえにくれた方を。
子羊や、だれがおまえをつくったの。
だれがおまえをつくったか知っているの。

子羊よ、教えてあげよう、
子羊よ、教えてあげよう。
その方はおまえと同じ名前と呼ばれる、
その方は自分を子羊と言われたから。
その方は柔和でやさしい、
その方は小さい子どもになられた。
私は子ども、おまえは子羊、
私たちはその方と同じ名前と呼ばれる。
子羊よ、神様のおめぐみあれ、
子羊よ、神様のおめぐみあれ。

これは美しい単純な詩で、それぞれの連を包み込んでいる繰り返しの詩行が、子どもの最初の

質問に自ら答え、そして最終的な祝福へとはっきりした思考の展開を強調している。韻律は強弱格であるが、「包み込んでいる」詩行にはすべて強勢がおかれていない、つまり女性韻で終わっている（例えば、'Little Lamb who made thee'）。一方、子どもの思考を詳しく解説している2つの連の中心の詩行では、強勢がおかれた音節ですべて終わっている（'We are called by his name'のように）。これは'made', 'tell', 'bless'と動詞に強勢をおくことで子どもの直接的な呼びかけと、強烈な最終韻によって相互に明白に分離されている子どもの解説的な思考を柔らかく区別している。生み出された効果は、伝えたいメッセージを叫ぶ子どもに囲まれた、一連の明白で直截な理念の印象である。

「子羊」は「無垢の世界」にしっかりと根を下ろしている。その背景は、「牧場」、「川」、「谷間」という農家や牛小屋と呼応する穏やかな田園的なイメージであり、図版に見られるように子どもと羊の背景にはどっしりとした檜の樹が立っている。子どもの理念は子どもと子羊と神が三者一体となり、最初の連では「輝く／いちばんやわらかな着物」と「谷間を喜びで満たす」「優しい声」に言及し、歓喜と安らぎを強調している。5行目の詩行はこれまで議論されてきたほどの問題はないだろう。つまり、「喜びの着物」は子羊は「喜び」を発散しており、このやわらかな羊の毛皮は次の詩行が解説するように「喜びに溢れている」ことを伝えている。ブレイクがこのように複数の意味を結び付けている巧みさは称賛に値するが、その意味の理解には何の困難も生じていない。この詩に欠落しているのは悲しみ、恐怖、夕べあるいは夜の影である。これはいかなる危険性も感じさせない詩であり、その図版に見られる全裸の幼児に相応しい作品となっている。

しかしながら、自然のテーマに関連して、子どもの質問は重要な意味を持つ。「子羊よ、だれがおまえをつくったの」という単純な問いかけは子どもが、その答えを試みていると同時に、数世紀にわたって数え切れないほどの思想家が問いかけてきた質問と同じであることに気づからざるを得ない。子どもは周囲の世界を見回し、眼にしたものから神の概念を推論する。それは明快な思考過程である。「私はこの種の自然を眼にする。自然は神が造られた。従って神はこの種の存在に違いない」。子どもは、餌に困らない、「牧場」や「川」で元気になった、やわらかで、ふわふわな、幸せな子羊を眼にし、神は、平明に表現すると、やわらかで、ふわふわとし、柔らかな方であると推論する。正に神は「私と私の友達」のような方なのであると。

子どもの幸福感と田園風景全体の歓喜は喜び溢れたものである。そして、ブレイクがその子を取り巻く世界に、愛と無垢な幸せを見出したことを信ずるに足る十分な理由がある。この美しい詩の喜びを取り去るつもりはないが、『無垢と経験の歌』に込められたブレイクの多様な見解から、ひとつの世界の限界を認識することを学んできた。また、子どもの描いた神を理解する仕方は数々の疑問を喚起する。自然は神を体現しているのだろうか？周囲の世界を見ることで神格を読み取ることが出来るのだろうか？もし子どもが（「煙突掃除の子」のトム・ダクレのように）苦難と醜悪な世界を見たらどうするのだろうか？その結果いかなる神の姿を子どもは推論するのだろうか？そうすると、昔からの悪の問題が想起される。つまり、自然においては善が常に悪を駆逐するとは

限らないのである。もし神がサタンより力があるなら、どうしてこんなことになるのだろうか？

この詩で表明されている子どもの信念に関する要点は、その信念を貶めるために子どもが欺かれているとか、かすかな危険が仄めかされているということではない。重要なことはこの美しい心に響く信念は自立しているものではない。つまり、子どもの信念は周囲のやさしい喜び溢れる自然を見続けている子どもに関わっているのである。子どもの信念は善であるが、それはこの詩が提示している空間の範囲内で、自分が存在している世界の中でのみ有効なのである。

「虎」

「経験の世界」の対応する詩「虎」は、「子羊」の子どもが尋ねている同じ質問で始めることでこれまでの要点を強調している。しかし、今度はその問いは恐ろしい獣に向けられている。

虎よ、虎よ、輝き燃える
夜の森の中で、
いかなる不滅の手が、あるいは眼が
汝の恐ろしい均斉を形作り得たのか。

いかなる遠い深海か大空で
汝の眼の火は燃えていたのか。
いかなる翼にのって彼は高く上がろうとしたのか、
いかなる手でその火を捉えようとしたのか。

いかなる肩、いかなる技が
汝の心臓の筋を振り得たのか。
そして汝の心臓が鼓動を始めたとき、
いかなる恐ろしい手が、いかなる恐ろしい足が。

いかなる鉄槌が、いかなる鎖が、
いかなる溶鉱炉に汝の脳があったのか。
いかなる鉄床が、いかなる恐ろしい把握が
その致命的な恐怖を握り得たのか。

星たちがその槍を投げ下ろし、
その涙で天をぬらしたとき、

彼はおのれの作品を見て微笑したか。
 子羊をつくった彼が汝をもつったのか。
 虎よ、虎よ、輝き燃える
 夜の森の中で、
 いかなる不滅の手が、あるいは眼が
 汝の恐ろしい均斉をあえて形作ったのか。

「ジェルサレム」¹⁵という賛美歌の歌詞と並んで、この詩は多分最もよく知られた作品である。読者は最初の2行の本能的知識と、若い時から耳に馴染んできた長母音の'i'を含む一本調子の'symmetry'の音の響きを克服しなければならない。これからの課題は音声とリズムとイメージを評価し、可能な限り詳細にブレイクの複雑な思想の足跡を辿ることである。

韻律上では「虎」は圧倒的に強弱格である。'Tyger, Tyger'で始まる強烈なドラムビートは事実上、詩全体を通じて響き渡っている。最終連では第一連を反復し、この重々しい一定の拍子を強調している。最初と最終連での唯一の変更点は'Could'を'Dare'に変えた、最終連の一語である。この違いはまた韻律を変更し、そこでは第一連のやさしい弱強格の詩行('Could frame thy fearful symmetry')が重々しい、打ち付けるような2重の強勢に置き換えられ、最終連の2つの長い母音('Dare frame')で終わっている。この変化はこの詩の疑問文に込められた恐怖と驚きが、詩の中で増幅している事実を反映している。つまり、詩人が虎について瞑想を深めるにつれて、創造主の力がますます強烈なものとなっているように思える。

韻律上では第三連は他の連とは異なっている。この連の2行目と3行目は弱強格である。しかし、最初と最後の詩行はスピード感のある規則的な中央の詩行と対照的である。最初と最後の詩行にはそれぞれの行の両半分に3つの連続した強勢が置かれている。'And what shoulder, & what art...What dread hand? & what dread feet?' この詩行の冒頭に関して、'and'に強勢を置くことには反論があるかもしれない。それは詩の読み方によるのである。しかし、この詩行には2つの強強格がある。この連の最終行は韻律分析がはっきりしている。'&'のみが強勢がおかれておらず、他のすべての音は強勢がおかれている。この二行は虎の創造主が持っているに違いない異常なほどの力を解説している。それはあたかもブレイクが通常包含している2倍の重みと力をこの言語表現に込めているかのようである。その結果は情け容赦のないものとなっている。実際上ひとつひとつの音声が強烈的な印象を与えている。その合間に、2つのリズムに富んだ弱強格の詩行で、虎の偉大な心臓が鼓動を始める。ここにおいてさえも、強勢の配置が強烈的な動詞'twist'に強勢を与え、'sinews'の強勢がおかれた音節と母音押韻で結び付けている。

それから第三連は強烈な創造の技を行使しているように思え、詩自身によって虎の心臓の鼓動を開始している。2重、3重の強勢は作品「虎」の他の詩行で、更なる同一の効果を生み出している。3行目の'Dare frame'に関してはすでに見解をまとめてきたが、詩人の問いかけである、反復さ

れている 'what' は、いくつかの束になった強勢群を生み出しており、創造主の力の招来を求めている。例えば、'In what distant', 'On what wings', 'In what furnace', 'What dread grasp' と 'dare seize' に、その効果を深めている長母音を見てみると分かるだろう。

作品「虎」は、悪の問題と真正面から向き合っているように思える。ブレイクは、「失われた」、「見つかつた」詩群の中で見出した、野獣と焰（あるいは黄金）の色合いの連想を継続的に利用している。多分、「燃えている」という表現は、次の連ではっきりしているように虎の眼に言及しているのだろうが、その表現はその獣の体全体が力とエネルギーで燃えていることを同様に示唆しているのだろう。その疑問文は「子羊」の子どもと同じやり方で創造主を理解しようと試みていくように思える。その創造物、虎から神の特質を推論しているのである。「燃えている」という表現は荒々しいエネルギーを暗示し、「恐ろしい」という表現は恐怖に囚われた質問者の心的状態を設定しているが、その質問者は虎の力に感動するあまり、表向きは抑制しがたい獣を「形作る」ことが出来るほどの強力な存在を想像することは出来ない。

しかしながら、この最初の連であいまい性が生じている。まず、視点や見方の課題が「夜の森」に存在している。「無垢」の世界は牧場と「谷間」の世界であり、森や夜は「経験の世界」の場であることはこれまでに明らかになった。従って、この詩行は、虎は「経験の世界」の暗い森の中から見ると「輝かしく」燃えているように見える。2番目に、「形つくる」には2重の効果があるように思える。その動詞は創造主の膨大な仕事を表現しているが、同時に芸術作品を作り出すこと、想像力に富んだ創作を示唆している。最後に、「均斉」は驚くべき単語である。恐怖と荒れ野は「均斉」とは一般的に対立関係にあるので、「均斉」は「燃えている」荒れ野やその隣の単語「恐ろしい」には相応しくない。その単語は完璧な調和を示唆している。それはあたかも虎の美の凄さゆえに恐ろしい存在となっているようである。

これまでに認識の突然の転換を示す野獣の変容の姿を見てきた。この虎は本当に危険な存在なのだろうか？虎の眼は本当に「燃えている」のだろうか？虎は「失われた少女」の獅子のように突然「ルビーの涙」を流したのだろうか？「夜の森」の住人は虎をあるがままに観ているのだろうか？それとも自らの恐怖と悲観的な見方から危険な獣を作り出しているのだろうか？この示唆に富んだ詩では、虎の恐ろしさは幻想であるという可能性がある。しかし、話し手には畏怖と恐怖が存在しており、納得できるものである。虎を創造し、その虎と対峙するために必要な勇氣は、第二連(2回)、第四連、そして最終連の'dare'に表現されている。しかし、この2つの'dare'は創造主の精神的勇氣を、「願う」想像力の力を(神はどうして虎を創造しようという信念を持ちえたのだろう)、虎を「形作る」想像力の範囲を伝えている。「あえて火をつかむ」創造主の理念は具体的な勇氣と耐えがたい苦痛を読者の心にもたらしている。同時に、このイメージには抽象的側面がある。というのは、「火」は虎の「眼」の焰であり、それは獣自身のエネルギーとヴィジョンと想像力を象徴している。即物的概念と抽象的概念は「あえて」「死の恐怖」を捉えている「把握」のなかで一緒になっている。

この詩に浸透している恐怖感は虎自身からその創造主へと流れるように移行している。その猛獣が「恐ろしい」存在であることは分かっているが、その恐怖感は「いかなる恐ろしい手が、いかなる恐ろしい足が」、 「いかなる恐ろしい把握が／その致命的な恐怖を握り得たのか」における創造主への恐怖感を生み出している。最後に、虎は再度「恐ろしい」存在となっている。恐怖と勇気がこの詩全体の雰囲気支配しており、ブレイクのイメージは同時に物理的、心理的力両者を一体化し、権力の両者の様式を虎とその創造主の特質であると考えている。¹⁶

そのイメージは権力と力に関する読者への印象を高めている。虎の製造過程の大半は重工業の仕事、特に金属加工作業に例えられている。「火」、「鉄槌」、「鎖」、「溶鉱炉」、「鉄床」、そのすべてのイメージがこのイメージに収斂している。読者は鍛冶屋の偉大な力、溶鉱炉の極度の高温と金属の妥協を知らない硬さの印象を受け取っている。しかし、この一連のイメージはまた産業革命と国民の奴隷化、機械に隷属した僕、生産活動の虜、利益追求への動機付けなどの連想を示唆している。特に「鎖」に言及することで奴隷制度と強制労働を暗示している。

他方、作品「虎」にはもうひとつの視点が込められている。「均斉」はこの詩の荒々しさと恐怖感という全体的な雰囲気には不釣り合いであることを確認してきた。「均斉」は虎が必ずしも恐怖を与える存在ではなく、美しい創造物であり、均斉が取れた調和した存在であるというもうひとつのヴィジョンの存在を暗示するひとつの契機となっている。第五連でこのもうひとつの視点が仄めかされている。「星たちがその槍を投げ下ろし、／その涙で天をぬらしたとき」という詩行はそれが聖書、あるいはミルトンへの言及であるかどうかは分からないが、対立的な心的状況を伝えている。この二行の行為は一種の武装解除の行為であり、星が天を涙で「ぬらす」際に想像力に富んでいると描写される感情の軟化の行為である。この二行はまたこの詩の音楽に変更を加えている。重々しい暗い'd'と第四連の最後にある歯擦音の'asp'の押韻語はなくなって、この詩行は美しい開放性、長く耳に残る音楽が導入されている。その音楽は長い開口音である'stars', 'threw', 'spears' ('stars'と'spears'の間には頭韻と母韻も入っている)によって生み出され、その後は無声帯気閉鎖音'heaven'が続いている。厳しい重工業の世界とは異なる場が導入されている。

それではいつ「星たちがその槍を投げ下ろし」したのだろうか。この詩行は「虎」の主題と関連しているふたつの暗示となっている。ブレイクの言葉の遣い方はこのふたつを包含しているように思える。まず、聖書の「ヨブ記」では、神が竜巻の中から現れてヨブに答えている。ヨブは絶望の淵に立たされ、自分の信仰に疑いをもち、自分の人生を呪っていた。ブレイクの詩と同じように、ヨブの人間的な理解と神の無限の知識の違いを強調している、一連の修辞疑問の形で神の答えは出されている。神は天地創造の際にヨブはどこにいたのかという問いから始められている。

わたしが大地を据えたとき お前はどこにいたのか。.....

そのとき、夜明けの星はこぞって喜び歌い

神の子らは皆、喜びの声をあげた。 (ヨブ記 第38章, 4-7節)

「ヨブ記」では星が「喜び歌い」、「喜びの声をあげ」ていた。しかし、ブレイクの詩行での文脈では、「星」はヨブ記と同じように神の天地創造の好意に込めている。それでブレイクの詩行を納得してひとつの暗示として解釈することが出来る。その暗示では創造の瞬間は交戦状態を解除し、自己防衛的な恐怖を解消し（「その槍を投げ下ろし」）、涙で天を「ぬらして」いるように、単純な「歓喜」よりも複雑な感情で星を満たしている。ブレイクは『天国と地獄の結婚』で見ると逆説的な極端な感情に関心を持っていた。その「地獄の箴言」のひとつで「過度な悲しみは笑い。過度の喜びは涙する」と語っている。また、「失われた少女」の獅子の罪を贖うルビーの涙や、笛吹きの歌を聴いて「喜びで涙」した子どもを思い出す。圧倒された「星」の涙する喜びに驚くことはないだろう。

検討している詩における別の作品に対する言及を特定するとき、一方のテキストともう一方のテキストの関係のより深い概念を理解するために、元の詩行の前後を読むことは有益であることがよくある。この場合、「ヨブ記」における竜巻の中からの神の答えについてより深く読むと、聖書のテキストとブレイクの「虎」との間のテーマの類似性を認識する一助となる。情け容赦のない質問に表現されている神の創造に関する説明は、暴力と権力で溢れており、そのイメージリーはそのような特質と関連している。そこでは、ヨブが馬に力を与えたのかと問い、神は「汝が馬の頸に稲妻で覆ったのか」と問われた。これと他の多くの類例が異なる特質を驚くほど結合させているブレイク独特のイメージリーを想起させる。「ヨブ記」第41章では神が「恐怖なしに造られた」リバイアサン¹⁷について詳しく描写しており、その描写の多くの要素が神の力と喚起する恐怖に対する驚愕を表現しており、その様子はブレイクの詩が表す心的状況を思い起こさせる。つまり、虎は末日のリバイアサンなのである。

鉄の武器も麦わらとなり
青銅も腐った木となる。 (ヨブ記 第41章19節)

ブレイクの詩行が暗示していると考えられる第二の文脈はミルトンの『失樂園』¹⁸の第6章に見られる反抗する天使たちの没落の場面である。

.....彼らはあらゆる抵抗を驚愕させ、
あらゆる勇気を失わせ、頼りない武器を捨てた。(『失樂園』第6章, 838-9行)

この言及に関する議論は天使の反逆は、人類の創造と墮落ばかりでなく、自らの地獄落ちと、結果としての大地の創造を避けがたいものとしている。つまり、この瞬間が神の力の重大な発揚の

瞬間であり、虎を含む自然におけるあらゆる善と悪の創造を前もって準備しているのである。この神の力の行使に微笑みかけることは、虎の形成過程への微笑みかけでもある。

ブレイクのこの作品を読む際に、読者は自分で選択することも出来るし、あるいはこれらの関連する両者のテキストを念頭に置くことが出来る。最初のテキストは人間の創造をはるかに超えた力、畏怖と歓喜で溢れた恐れ、大いに創造力に富んだ逆説的な感情（「涙で天を濡らした」）を喚起するという古い意味で「恐ろしい」力を示唆している。2番目のテキストは悪の逆説を喚起すると同時に、破壊的な神の力を示唆している。つまり、神による悪自体の創造と支配を示唆しているといえる。ブレイクを含む大方の見方では、ミルトンは『失樂園』全体を通じて、この逆説との格闘に敗れているといえる。¹⁹

この箇所は大いに紛らわしい二行連句であり、重要な瞬間なので回り道をとってきた。詩作品の中で視点を転換しているといえる。開放的で穏やかになった調子はこの連の最後の二行まで続いている。'smile'と'see'は's'の頭韻を拡大しており、滑らかなはっきりした言い回しは'smile', 'made', 'make', 'thee'に見られる純粋な母音によって維持されている。そうして、一方では開口音的な押韻語が各行の最後にやさしく落ち着いている。「ヨブ記」における創造の業と『失樂園』の逆逆する天使の敗北に対する引喩は躊躇しつつも創造的であり、破壊的な力という理念を作り出している。「ぬらされている」という豊かな再生という当然のイメージが続いている。ブレイクが神の「笑み」と子羊の両者を、驚きと驚愕が基調となっている修辞疑問文をもって導入しているのはこの時点なのである。

この詩の最終連は第一連の繰り返しであるが、1語だけ、'Could'が'Dare'に置き換わっている。従ってこの一語に関心を向けざるを得ない。勿論、その変更は創造主の勇気をまず強調しており、金属細工の仕事や溶鉱炉のイメージャリーがこの展開を正当化している。つまり、虎は実に強烈で恐ろしい動物なのでより強烈な'dare'は創造主への問いかけとしては相応しい問いといえる。しかし、その前の連とその急進的なもうひとつの視点という文脈では、この詩は今まで以上に鋭い質問を問いかけているように思える。多分、それは再度ヴィジョンの問題である。虎は外見上脅威を与える動物であり、その獣は力強く、潜在的に破壊的な存在である。「経験の世界」の視点からすると、すべての観る者に明らかであるように暗い森と対照的に「燃えている」。しかし、異なるヴィジョンでは虎の創造は自然の恐怖を解消し、自然に生氣を与えているひとつの勝利であり、笑みをもたらす出来事なのである。ここでは明らかな対立的存在である虎と子羊は実は同属であることを示唆している。このふたつの生き物は自然の一部であり、巨大で野生的で強力であるが無垢な創造物なのである。

作品「虎」の形式はこの示唆を気をもたせつつも支持している。ブレイクは一連の修辞疑問の問いかけにおいて実に厳密であり、その答えの一部は読者にとって明らかである。つまり、創造主が誰なのかという問いについては、その答えは「神」である。同一の創造主が虎と子羊を作ったのかという問いには「その通り」と答える。しかしながら、ブレイクの問いかけのより難しい

側面に関しては即答は出来ない。これらの疑問が示唆するところは「何故そのような恐ろしい生き物が創造されたのか」、「そのような力をどうして抑制できるのか」ということである。破壊という問題、つまり、「悪の問題」を考慮するならば、さらに難しい問題が生起している。ブレイクはこれらの疑問に解答を与えず、最初の連を繰り返すことでこの詩をまとめている。従って読者は虎そのものと残されており、暴力と力の行為として、豊饒の喜ばしい瞬間として、虎の創造というヴィジョンを与えられているといえる。

虎は謎めいた存在のままである。虎は断固として存在しており、そのイメージャリーに「安易に読み込む」ことは回避すべきであろう。「溶鉱炉」、「焰」、「鉄槌」、「鉄床」のような強烈な理念に反応するとき、純粋な権力と力に反応しているのであるが、その力の効能に関しては何の情報も与えられていない。作品「虎」には悪意と破壊の証拠はないことを想起することは重要である。それは単に権力であり、虎はそのままの存在としてあり、断固として存在し続けている。

「あえて形作る」という最終連の2語と反復されている同着語法表現である「恐ろしい均斉」は認識の問題へと立ち戻ることにある。その唯一の特質が想像を超えた権力である、この謎めいた生き物をどうすれば「形作る」ことが出来るのだろうか。そうして、「均斉」という概念に伴う当然の恐怖の反応とどうすれば和解出来るだろう。このように、この詩は読者の想像力に対するひとつの挑戦である。読者はヴィジョンに富んだ眼を見開き、2つ以上の視点を意識しうる「2重のヴィジョン」に到達するように促されているのである。「あえて」を強調している最終行は、この責務を果たす勇気を見出すように読者は挑戦を受けているのである。

この詩の図版は全体としてこの詩の謎めいた効果を高めている。虎は木の葉を失った樹木の元に立っており、その顔はデヴィット・V・アードマンによると、3番目の枝の上方に「恐ろしいというよりはむしろ滑稽な」容貌を示しており、「どうしようもなく落胆した」、「やせ細った脚をした弱々そうな」容貌をしている。この虎の顔つきは版によって異なっている。「心配そうな」、「微笑んでいる」、「尊大な」、「耐えているような」、「優しい」容貌とさまざまに評価されてきた。²⁰ 虎の眼は丸く、おどけた様子が伺われ、ケインズの複製版では、虎は遅れて到着した理由を、かなりもったいぶった様子で説明しようとしているような印象を与えている。この図版は實際上、第二連から第四連にかけての恐ろしいイメージャリーに対する一種の相殺要素、均衡を保つ材料としてそこに置かれているように思える。しかし、その図版は読者に「微笑み」をもたらさず、勇気を喚起する要因とはなっていない。

全体の最終的な効果は、読者の人生を通じて関わってきた行動に関する一種の感想をまとめているのである。つまり、取り巻く世界を解説し、解釈し、精通しようとする努力を物語っている。同時に、対をなす詩「子羊」と併せて、この詩はこの巨大な仕事に持ち込んできた道具、生まれながらの眼と感覚、個人的体験、有限から無限を演繹しようと試みる貧弱な理性に対する抑制の効いた風刺である。

まとめの議論

『無垢と経験の歌』での自然のテーマを9つの作品を通して探求してきた。これまで、ブレイクの詩の世界に関して多くの新たな発見があったし、多様な認識方法や「ヴィジョン」の概念について洞察を深めてきた。しかし、以下の結論では自然のテーマ自体に注目し、これまでに学んできたことをまとめておきたい。

- 1 さまざまな情景に出会ってきた。まず、「牧場」、「谷間」、「緑の野原としあわせな森」というやさしい農村風景があった。「子羊」の図版には牛小屋や農家とその背景に描かれているし、一本の檜の樹が安心感を添えている。この情景には小鳥や樹木や「蕾と花」はあるが、森は描かれていない。これは無垢の世界の風景である。第2に、暗い森、「虎」の「夜の森」にも出会った。この暗い森には獲物を狙う野生の獣があった。他の2つの情景は「経験の世界」で認識された自然の表現があるように思える。つまり、露に濡れた「深い泥沼」に囲まれた「淋しい沼地」と「淋しい谷間」がある。また、いなくなった娘をライカの両親が探している「道なき道」や「深い谷間」に囲まれた「荒々しい砂漠」がある。「砂漠」はまた獅子、虎、狼の帰るところではない。
- 2 この様な情景は信じられるものであり、自然なものである。それは『無垢と経験の歌』では成立可能な自然の認識法であり、ひとつひとつの環境には否定しがたい真理が存在する。「子羊」の子どものやさしい背景は子どもの真実の生活体験である。一方、「無垢の世界」で神の幻が迷った子どもを救う「淋しい沼地」は真の荒野である。しかし、この様な情景は「無垢の世界」と「経験の世界」の心的状況をも象徴している。その姿は自然の真実の認識法であるが、それは自然そのものではない。
- 3 このような自然の主観的な認識法は詩の中で変容を受けている。特に「失われた少女」と「見つけた少女」ではその認識の仕方は、異なる登場人物の視点に限定されていることを見てきた。そこで、ライカは「真夏の盛り」にあって、「野鳥」に囲まれ、樹木の元に横たわり、夏は永遠に続いている。両親は同じ風景の中にいるが、二人は「道のない」「荒れた砂漠」を見ている。その詩の伝説は「荒れた砂漠」は「優しい園」になることを予言している。従って、ふたつの対立的な情景は同じ場所に同時に共存していることになる。ヴィジョン、あるいはその欠落は自然の見方を決定付けている。
- 4 野獣はいくつかの詩の中でその姿を現している。ブレイクはその獷猛さを和らげてはいないが、自然のエネルギーを恐れている人間を批判している。ライカの両親が獅子と出会った時、彼らの五官はその獣を正確に認識している。獅子の力、大きさ、そのたてがみの荘厳さを認識し、自分たちの周りを歩き回り、匂いを嗅いでいた。同じように、その詩の最後で本能の赴くまま、獅子は未だに「うなり」、狼は未だに「吼えている」。しかし、五官では物理的な

対象しか認識できない。それでは本質を認識することは出来ない。ブレイクが「ヴィジョン」と呼び、五官が用いられていない異なる種類の認知方法は、自然の本質を理解し、認知することが出来るのである。ライカの両親は（物理的）獅子と（ヴィジョンで観た）「黄金の鎧をまとった霊」の両方を見ているときは、正に「ヴィジョン」の瞬間なのである。

- 5 自然に対する主観的な認識方法に焦点を当てたブレイクの効果は、自然自体は謎めいたものであるということである。自然は本質的に善なのか悪なのか、優しさなのか暴力的なのか、善意であるのか、悪意であるのか結論付けることは出来ない。これらの作品では自然自体は単に存在しているのである。自然はあるがままに存在し、道徳的、あるいは感情的な特質を有してはいない。すべての観る者は自然に対する意図と感情を、強烈にそして一貫して投影しているので、これは逆説的な結果をもたらす。
- 6 人間にもひとつの自然がある。自然な感情と欲望である。ブレイクはその感情と欲望に付き従いそのまま表現されるべきことを暗示している。「天使」の作品の中で欲望の妨害、抑圧、歪曲の姿を見てきた。その結果は虚言、敵意、人生の浪費であった。また、ライカの両親が、感情的な恐喝の形を取りながら、自分たちの恐怖と悲惨さを娘に押し付けようとしているように、歪曲され、自己中心的な感情の横暴振りを目撃してきた。
- 7 健全な感情を否定的なものに、つまり、憐憫への欲求と自己防衛的敵意へと歪めることは、セクシャリティに関する感情に焦点を当てることがしばしばある。例えば、ライカの両親は獅子の男性性の提示に恐れおののいている一方で、その娘の障害のない自然な成長は雌獅子が「薄い着物を脱がせ」た時、際立っていた。「経験の世界」の「失われた少女」という詩作品は、性に対する清教徒的な恐怖と嫉妬とその悲劇的な結果をはっきりと検討している。しかし、これまで検討してきた「天使」は、また不誠実な感情によって破壊された潜在的な愛の関係を提示しているといえる。

最初のふたつの章で『無垢と経験の歌』に関する多くの洞察を積み上げ、ブレイクのテーマとその手法についての健全な理解を深めつつある。ここでこれまでの理解を進めて、ブレイク的全作品の中でもより難解な詩作品、預言書群と一般に呼ばれている長めの物語詩へと向かう段階に至っている。従って、自然に関する結論を再度取り上げ、『天国と地獄の結婚』という短めの預言書との関係でこのテーマについて検討してみよう。

『天国と地獄の結婚』における自然

『天国と地獄の結婚』はアイロニーに富んだ、議論の的となっている作品である。その意味の多くは天国と地獄、天使と悪魔をアイロニーを込めて逆転させているブレイクの理由の捉え方にかかっている。その作品の意味を考えると、『無垢と経験の歌』におけるブレイク

の論法の基本に出会ったことになる。

「大地の答え」において、「冷酷で嫉妬深く身勝手な恐怖」を抱いている「人間の身勝手な父」の声を聞き、白髪で権威主義的な「神」の専制的な抑圧に出会ってきた。「経験の世界」への「序の歌」において、再び重要な文脈の中でアダムとイブを呪っている神に出会った。それから、自然とセクシャリティに対する教会の姿勢についてのブレイクの考えを学んできた。ブレイクは教会が節度がなく、嫉妬深く、冷酷であると批判していた。

「子羊」と「夜」の両作品において、来世への牧歌的な夢を抱いている「無垢の世界」の素朴な信仰への二律背反的なブレイクの態度を見てきた。無垢と経験の両詩集にある「煙突掃除の少年」ではそのテーマを更に深めている。「良い少年」であるべき道徳上の指南書であり、それがトム・ダクレが天国の夢を見るのが許される条件である。「ぼくたちの惨めさで天国をつくっている…神さまや坊さまは」という「経験の世界」の煙突掃除の少年の辛辣な詩行は教会に対するブレイクの怒りを表現している。ブレイクにとっては、教会は冷酷な社会組織を維持するために虚言を弄している。聖職者は従順の見返りに天国を約束し、そうすることで国家と経済上の独裁制度を守るために虚言を弄しているのである。

教会に対するブレイクの攻撃目標は2つある。まず、ブレイクは抑圧的で自然の法に反する律法を強制している宗教を攻撃している。次に、人々の恐怖を増幅し、人々を絶望に囚われた状態においている宗教を、そうして天国という偽りの約束で人々を欺いている宗教を攻撃しているのである。

『天国と地獄の結婚』ではブレイクは教会の専門用語を皮肉を込めて援用している。自分の見解は当時の社会体制と激しく対立していることは十分に意識していた。18世紀末の多くの聖職者にとってブレイクの見解は、教会の権威にとっては悪であり、治安妨害的な脅威だった。彼らにとってブレイクは、教会への従順から人々の気持ちを離れさせるサタンの声の代弁者であった。この様な状況の下では、ブレイクは大胆にも自ら聖職者を名乗り、公然と「天使」と対立する「悪魔」の味方をしている。

ひとつの論争として、『天国と地獄の結婚』は『無垢と経験の歌』の議論で可能であった以上に明確に自然の認識法を扱っている。従って、これまで検討してきた作品の中に微妙に織り込まれてきた様々な自然の認識法が、この作品では幅広い風刺として、はっきりとした結論を伴ってその姿を明らかにしている。第4の「忘れられない幻想」で天使は、詩人の伝統に反する理念に強く不快感を覚えた、情け容赦のない聖職者の声で語り、ブレイクを激しく批判していた。

おお、哀れな愚かしい若者よ！おお、恐るべき、おお、ひどい惨状よ！汝らが自ら招いている永劫の焦熱地獄の運命を熟慮せよ。汝らはまっしぐらにそこへ墮ちつつあるのだ。

その天使の議論はほほえましいものであり、陳腐な'thou'や'thysel' という気取った大げさな表現と貧困な語彙('hot burning' という類語反復や'going in such career' という凡庸な表現)を組み合わせていた。ブレイクは天使に自分の永遠の運命を示すように求め、そうすればその厚意には報いたいと答えている。天使は同意し、二人で馬屋、教会堂、粉引き小屋、洞窟へと進み、広大な地下の空間の屋根からぶら下がり、見下ろしていた。その際にブレイクが描写する地獄の情景は実に鮮明であると同時に滑稽なものであり、風刺の傑作といえる。レバイアサンの以下の描写でその絶頂に至る。

...やがて東の方に3度ほど離れた辺りに、燃えるような頭が波の上に現れ出た。黄金の岩山の背のようなその頭がゆっくりともたげられてゆく中に、紅の焰を噴き出す2つの目が現れたが、闇の海は恐れて煙雲となって逃げていった。我々はそれがレバイアサンの頭であることに気づいた。額には虎のように緑と紫の紋があった。やがて彼の口と赤い鰓が荒れ狂うしぶきの真上に現れたが、真っ黒な海を血の輝きで染めながら、霊界の者の持つすさまじさで、我々に向かって突進してきた。

万が一、レバイアサンの恐ろしさを偽った外観を確認できなかつたり、ブレイクのメロドラマのような寄せ集めの表現(「海は恐れて煙雲となって逃げていった」、「真っ黒な海を血の輝きで染めながら」)の調子を掴めなくても、「額には虎のように緑と紫の紋があった」レバイアサンの頭部の描写によって、虎を思い出さないわけにはいかない。明らかにこの様な描写は、作品「虎」における畏怖の念を喚起するイメージアリーと同じ役割を果たしている。それは正に恐怖に駆られた天使の視点から見る地獄の姿であるが、それは真実ではない。ブレイクは視覚的に誘導するイメージ(「燃えるような頭」、「黄金の」、「岩山の」、「紅の焰」、「煙雲」、「緑と紫の紋」)でその幻想を維持している。最後の表現のみが明らかにそして不条理なほど陳腐であり、「霊的な」という一語でこれらすべての具象的な印象を退けている。

「忘れられない幻想」で天使は再び皮肉を込めて自らを徹底的に恐怖に追い込み、逃げ出している。そうして、その瞬間、その場面は姿を変えている。

幻は掻き消えて、いつの間にか私は月光の下、川のほとりのさわやかな岸辺に坐って、楽人の歌に聞き入っていた。彼は豎琴をかきならしながら。

「紅の」、「焰」、「煙」、「紋」、「血」という強引な表現は天使のヴィジョンと共に消えて、やさしい破裂音の「さわやかな岸辺」と頭韻でまとまった「楽人の歌に聞きいって、…豎琴をかきならしながら」で取って代わられている。ここでは、地獄と野獣のレバイアサンの恐怖が、子どもたちを脅かすために使われたお化けの物語に例えられている。恐怖に駆られた天使が再度ブレイク

に会うと、現実と信じていた恐怖から詩人が逃れていることを知って驚愕している。ブレイクは「我々が見たものはすべてあなたの形而上学から生じた幻です」と答えている。明らかに、ライカの両親が獅子が「その獲物」の匂いを嗅いでいる姿を想像しているとき、天使による地獄のヴィジョンはその両親によって獅子の行動におかれた構造に匹敵する。それは恐怖によって創造され、支配されている認識であり、真実ではない。

この一文はブレイクの奥が深く難解と言われている預言書群の解釈への最初の契機となるものであり、『無垢と経験の歌』の一部の作品の視点と、『天国と地獄の結婚』のこの明白な風刺の一節で語られた視点との間の類似点を特定することは、理解への一歩となるということがはっきりした。しかし、この明晰さは、選択的であった故に可能となったことを認めるべきだろう。例えば、この地下の洞窟への二人の人物による旅について、その途中で二人が馬屋（「指示の馬」を示唆している）、教会（宗教的正当性）、地下室（情熱の墓）、粉引き小屋（産業、物質主義、経済的隷属制度）を通り抜けてきたことには触れていない。また、ブレイク自身が短期間所属していた一派であり、その教義を拒否することになった、神学者であり、預言者でもあったスエーデンボルグ²¹を想起させる「わすれ得ぬ幻想」の箇所は無視してきた。

予言書群の作品に初めて手をつける際には、このような「選択的な」読み方を採用することは理にかなったことだろう。まず最初に、言葉と描写と語り手によって、ブレイクの意図するところをはっきりと打ち出している箇所に集中したほうが良い。短い詩作品で親しんできた共通点を認識し、それからまずテーマをきちんと把握したほうが良い。続いて、分かりやすい注解付きの作品集やブレイクのコンコーダンス²²が備わった図書館が、より深遠な引喩とその寓意的な世界の意義を調べる際に役に立つだろう。

これまで『無垢と経験の歌』で培ってきたものを生かし、理解できるという自信を持ってこの『天国と地獄の結婚』に辿り着いた。図版14番の明らかに論議的となる引用箇所を見ながらこの考えにより厳しい試練を与えてみよう。

世界が6000年後に火の中に消滅してしまうという古来の言い伝えは、私が地獄で聞いたとおり本当である。

焔の剣を以って生命の樹を守ってきた天使ケルビムはその任を解かれる。しかる後、この有限で腐敗の様相を呈していた宇宙が火中に消え、無限で神聖なものに変わる。

これは感覚の喜びを純化することによって達成できる。

しかしながら先ず、人間は霊から分離した肉体を持っている、という観念を一掃すべきである。

私としては、地獄の印刷法によってこれを行おうと思う。地獄にあっては健全で効き目があるとされている腐蝕薬を用い、表面を溶かし去り、隠れている無限を引き出す方法である。もしも知覚の扉が磨き清められたなら、万物はそのあるがままの姿に映し出されるであろう。

すなわち無限に。

人間は己を閉じ込め、その洞窟の僅かな隙間から物を見るようになってしまっている。

この一文から何が分かるだろう。最初に細部にはあまり拘らず、ブレイクの全体としての主題についてまとめてみよう。この段階では、世界の終末に関する言及に理解がつかないし、印刷術と「知覚の扉」の清掃との関連性を十分に消化しえたわけではない。その一方で、この一節のある要素とある表現はその主題に関して十分な材料を与えている。ブレイクはひとつの変化について語っている。現時点では世界は制限を受けているが、未来に何かが起こり、「有限」と「墮落」の世界から「無限」と「聖なる」世界へと変容するのである。「もし知覚の扉が清められるならば」という忘れ得ぬ表現は、この救いとなる未来の変化は人間の見方、つまり、ヴィジョンと関係していると語っている。

従って、主題は世界を墮落から救い出すこれから起こるヴィジョンの変革である。これがこの一説に関するごく一般的なまとめであり、それでは次に細部をより詳しく調べてみよう。

この一節は「この世の終末」、つまり、「ヨハネの黙示録」に関する言及から始まっている。ブレイクはお高く留まった態度でこの知らせを「地獄」で聞いてきたと語っており、これは作品全体に見られる皮肉を込めた倒置法が続いている。この皮肉溢れる「悪魔のような」人物を通して、ブレイクは反教会的な見方を提示していることははっきりしている。次に、ブレイクは「創世記」に言及して、生命の樹を守っているケルブにその場を離れるように要求している。聖書からの関連詩行は次の通りである。

こうしてアダムを追放し、命の木に至る道を守るために、エデンの園の東にケルビムと、きらめく剣の炎を置かれた。
(「創世記」第3章24節)

「創世記」第3章は以前に言及している。アダムとイブがエデンの園を散歩中に「神の言葉」を耳にした章である(第1章における『経験の歌』の「序の詩」に関する分析を参照)。神は二人に呪いをかけ、彼らはエデンの園から追放される。神が最後にとった行動は生命の樹から人間を遠ざけるために、番人としてケルビムと剣を置いたのである。その呪いと追放は、アダムとイブの自然な欲求に対して過度な怒りに任せて、嫉妬に駆られ自己中心的になった神の所業であったとブレイクは考えている。そこでブレイクは守っているケルブにその場を去るように命じている。つまり、ブレイクは人間に、いわゆる禁制と墮落以前の状態に、人間が知識とセクシャリティを何の制限も受けずに手に入れることが出来る状態に回帰するように命じている。

この呪いと禁止する律法を排除することで現在の墮落の状態から世界は変容し、すべての存在の中に「無限なるもの」を顕に出来るとブレイクは主張している。これは明らかに性に関する抑圧と上品ぶった態度への決別の要請である。人間は抑圧されたり、妨害されるべきではなく、人

間の欲望には自然に妨げられることなく解放されるべきなのである。ブレイクは次のように書き綴っている。「感覚的喜びを改善することで明らかとなるであろう」。

ブレイクは次の段落で、性に関する当惑、嫌悪感、抑圧という一般に流布した態度を生み出している重要な誤りを明らかにしている。あまねく、教会が、人間には魂（ある時には精神、または理性）と肉体があり、肉体は悪でその衝動が罪と地獄へ導く、従って、魂（あるいは精神）が肉体を支配し、否定することで貞淑な日々を送る助けとなると教えてきた。何世紀にも渡って肉体を不審の目で見、嫌悪すべきと教えられてきたことは、中世の罪の概念（大食、色欲、強欲、貪欲など）を思い起こしてみるだけで十分だろう。現代にあっても無頓着でいるわけにはいかない。「自己を抑制しなさい」、「度を越してはいけません」などの表現を頻繁に使っていないだろうか。

ブレイクはこのような肉体と魂を対立的存在とする考えを拒否した。肉体と魂は一体であり、人間は統一体であり、肉体と魂は共に調和していると信じていた。そこでブレイクは次のように語っている。「しかし、まず、人間には魂とは別の肉体があるという概念を排除しなければならない」。

ここで印刷に関する喩えを見てみよう。ブレイクはテキストと図版の周りの金属を腐蝕するために酸を用いていた。酸は文字と図版の周りを焼き落とし、それらをはっきりと際立たせ、インクによって紙に印刷できるようにする。ブレイクはこの工程を、世界の表面的で、人を誤らせる要因、つまり「外見上の表面」が溶解し、「隠されていた無限」が見えてくる過程になぞらえている。この経緯を「知覚の扉がきれいになった」と言い換えているのである。この「知覚の扉」とは五官のことであり、ブレイクの前後の文章は、人間の五官は偽りの印象を暴力的に、徹底的にはぎ落とす際に、「腐蝕させるように」酸で浄化する必要があると示唆しているのである。地獄ではこの手法は「治療力がある」と言われているという解説は、ブレイクがいかに暴力的で徹底的なヴィジョンの変革を念頭に置いていたかを窺わせる。

五官の「浄化」によるヴィジョンの解放、肉体と魂の再統一、「感覚的喜びの改善」はすべてケルブを排除することで可能となる。平明に言うと、ブレイクの計画された革命の最初の行動は宗教上の呪いと律法の排除である。ブレイクの計画は18世紀の聖職者たちを恐怖に陥れたであろう。ここには公然と不道德を奨励し、律法の否定を公然と宣言し、あえてエデンの園における神の行動に異議を唱える一人の男がいた。聖職者であればこれは「悪魔の」教義であると確信するだろう。

しかしながら、『無垢と経験の歌』のこれまでの研究では、抑圧されたセクシャリティがもたらす悲劇的な結末を見てきた。『経験の歌』での「天使」は2つの歪曲された欲望の形と空費された人生の例を見てきた。ライカは娘のセクシャリティに恐れをなした両親による独裁的な感情的な恫喝に晒されている。『経験の歌』の「失われた少女」ではこのテーマの解明を更に進めている。ここではブレイクは、日々眼にしていた(今日でも見られる)すべての分裂した自我と個人的な偽善の原因を率直に明らかにしている。現代の心理学と合致している点に注目することも興

味深い。つまり、自己嫌悪、自己欺瞞、自己虐待、抑圧された欲求、歪曲された衝動、これらすべては、人間関係と満足を求める模索で失敗をもたらす悪役である。肉体と霊を対立させることで、教会の教えが人間の間につらい分断を生み出している原因である。自然な欲望を禁ずることでは教会は人々に暴政を振りかざし、誤らせている。次の章でこの問題に戻ることになる。

これまで解説してきた箇所は「ヴィジョン」の概念に焦点を当ててきたし、『無垢と経験の歌』以来これはよく馴染みのある課題である。ライカの両親は、自分たちの狭い、謝った五官から新しい素晴らしい知覚へと発展する過程を経てきた。明らかに、獅子が二人をなめた瞬間、二人の「知覚の扉」が突然浄化され、その結果獅子を「黄金の鎧をまとった霊」と見るようになることは、「創造物すべてが…無限性と聖性が明らかになる」ようなことである。この一節では、ブレイクは五官に対して2つのイメージを追加している。まず、五官は「知覚の扉」、つまり「人間の洞窟」の「狭い隙間」である。『地獄と天国の結婚』においてブレイクはその責任を人間自身に負わせて、自分の理念を進展させている。「洞窟」の「狭い隙間」からしか見えない理由は、「人間自らを閉じ込めている」からなのである。ここで背を向けて、頑強に夜明けの到来を認めようとはしない大地のことを思い起こしてしまう。『天国と地獄の結婚』の別の箇所で、もし五官を物理的感覚にのみに限定するならば、自分自身を「閉ざし」、隠喩的には自らを盲目にしているとブレイクが信じていたことが明らかになる。

風を切って飛翔する鳥は無限の悦びの世界そのもの
だが五官に阻まれて、人間は知るよしもない。

一遍の預言書を紐解くことで何を学ぶことが出来るのだろうか。まず、短い詩の分析を通じて学んできた自然に関する見解や感覚をここではっきりと確認することが出来た。2番目に、『無垢と経験の歌』で暗示されていたが、次の議論の多い作品の中で一層はっきりと扱われている2つの疑問に関するよりしっかりした結論に辿り着くことが出来た。まず、『無垢と経験の歌』で「正常な」状態と思われている五官の限界は、突然「ヴィジョン」に晒されることになる。この理念を辿って『天国と地獄の結婚』までやってきた今となつては、非常に多くのことを理解するようになってきた。つまり、五官を物理的に活用することは監獄や目隠しのようなものであり、それは人間自身の責任である。そして、五官を解放する、つまり「浄化する」ことは暴力的なプロセスなのである。次に、抑制を受けていないセクシャリティへ向けられた暗示や、ライカの気取った抑制に敵対する暗示は、ライカの全裸の姿に存在し、作品「天使」の「乙女の王女」の物語の中に暗に込められていた暗示は強烈にはっきりとしたものとなった。ブレイクは「感覚的喜びの改善」を唱導しているのである。また、これらの問題の根本原因に関してより深く学んできた。ブレイクはその問題を辿って「創世記」の墮落と追放をもたらした清教徒的の神の姿、肉体と魂を分裂させている教会の教えの過ちに到達している。

最後に複雑に絡み合っているブレイクの思想を理解し始めているといえる。これは特にブレイクの特徴である。作品に初めて会おうと、恐怖の状態であろうが、喜びの状態であろうが、はっきりした感情、あるいは受け取った感情に反応する。しかし、検討を深めることでこの詩的「状態」は統合されて一貫性のある分析が可能になるということを理解するようになる。その「状態」あるいは感情は、同時にひとつのプロセスの両端に達しているように思える。つまり、その「状態」はそれが生まれる方法を見出すための分析的思考への動機付けを提供している。そうして、それはまた思考のプロセスの到達点であり、その状態を必然的に生み出してきた理性の結果である。そこで、例えば「天使」の最後で「…青春の時代は飛び去り／白髪が頭にあった」という突然の絶望感を味わう。人生が空費されてしまったという、打ちのめされてしまうような自覚があった。ここで質問を問いかけ、答えることが出来る。

何処で間違っただろう？

彼女は自分の喜びを隠した。

何故？

何故なら喜びは不興の対象だったので、「処女王女」としての自己イメージに逆行するからなのだ。

何故喜びは不興の対象だったのか？

何故なら教会がそう教えていたのだから。

何故教会はそう教えていたのか？

彼女が嫉妬心から逃れ、自由になるのを妨げるために。

何故教会が嫉妬しているのか？

何故ならそれは古い、白髪で、無力な組織なのだから。

教会はどのような方法でその教えを行っていたのか？

肉体と魂は相互に対立していると彼女を納得させていた。

ここでもうひとつの方向に向けて再開することが出来る。今度はより簡潔にその理由をめぐって旅してみよう。

肉体と魂の分裂を教えることから何が生まれるのだろうか？

肉体への憎悪であり、すべての官能的喜びを禁じている。

喜びが禁じられたら人はどのように行動するのだろうか？

自分の衝動を歪曲し、隠蔽し、曲解する事になる。

すると人はどのように振舞うのか？

感情的になって過酷な要求をし、抑圧され、不誠実で、敵意に溢れ、自己防衛的になる。

自分自身の状態は？

惨めで徒労感に襲われている。

そこで、一連の理由が繋がっており、この詩の「人生経験」から本来の原因へと立ち戻ることが

出来る。そして、必然的な結果としてその詩の「人生経験」を予測できる原因から前へと進んでいる。

結論

今や検討すべき自然の「ヴィジョン」を手にしてきたが、このような突然の洞察に関する2つの要点を整理しておくことは価値がある。その洞察は「内なる」眼が「五官」の監獄から抜け出し、世界の本質が見えてくるときに生まれるのである。

- 1 最初に、今まで見てきた「ヴィジョン」の瞬間はすべて肯定的なものである。ライカの両親がそのヴィジョンに富んだ姿の獅子を見るとき、「黄金の鎧をまとった獅子」を見ており、自分の恐怖を忘れていた。ブレイクがレバイアサンの偽りのヴィジョンを破壊すると、静寂と美という真実が明らかとなっている。「心地よい川辺」の上で琴の弾き手に耳を傾けながら。神が虎を創造したとき、星は「槍を投げ下ろし／涙で天を濡らした」、その涙は驚きと歓喜の涙で、悲しみの涙ではなかった。『天国と地獄の結婚』では、ブレイクはこのヴィジョンの啓示の瞬間に別の名称を与えている。明らかに「有限で、墮落した」世界を超越すると、啓示によって明らかにされたもの、つまり、自然の真の本質は「無限で聖なる」ものとして現れる。同じ一節で「無限なもの」は真の自然の特徴を明らかにするために更に2回使われている。

これは2つの疑問に対するひとつの答えとなっている。ブレイクは楽道家で、自然は本来善なるもので、本来素晴らしく神格的なものであると信じている。しかし、「無限」という言葉に注目すべきであろう。自然はいかなる意味においても限定されておらず、自然の力と恐怖を与える外観はその輝かしい善意と歓喜と同じように無限なのである。

黄金、燃えている、輝いているという光沢のある強烈な色彩語は、深い極端な感情表現（例えば、ライカの両親の「深い驚き」）と同じように、真実であり、無限である自然の肯定的なヴィジョンと繋がっている。これらの啓示と純粋な瞬間と、『無垢の歌』に見られる子どものような信仰として描写されている肯定的な天国の夢との間には未だに混乱があるかもしれない。しかし、「無垢の世界」での失われた少年を救済している「白衣をまとったお父さんのような」神という矛盾した感情も持たれるが、一時的には元気を与えてくれる夢と、ブレイクが「真の」ヴィジョンのために留保している、より断固とした断定的な陳述を区別することを学びつつあると言える。

- 2 次に、どのような条件が突然の「ヴィジョン」の到来をもたらしているのだろうか。これまで検討してきた3件のそれぞれの場面で、共通しているのは頂点に達した感情であった。トーマス・バッツに宛てた詩の中でブレイクは朝のまぶしい美に忘我の姿を描いている。「驚

き、恐れ／ひとつひとつの物質に見入った」し、「突然の驚きに囚われ、驚愕して」自分の感情の高揚した状態を強調している。『天国と地獄の結婚』ではレバイアサンの天使によるヴィジョンはその怪物が接近するに従って鮮烈な力が高まり、その頂点の瞬間に、あまりの恐怖に圧倒され、天使はその場を逃れることになるが、その瞬間、「ヴィジョン」が訪れている。この極端な恐怖とヴィジョンの同一の密接な関係はライカの両親の場合にも成り立っている。両親は恐怖のあまり大地にひれ伏した後で、「深い驚きをもって」獅子が「黄金の鎧をまとった霊」であることを認識している。印刷用の銅版上でブレイクの版画の周囲を腐蝕する酸と、内なる眼の浄化、つまり、ヴィジョンへの障害物を燃やし落とすこととの、『天国と地獄の結婚』における理論的な類推は同じような結論を暗示している。つまり、ヴィジョンの達成は激しく、根源的な、そして、少なくとも当初は恐怖感を与えるプロセスなのである。

分析方法

本章では、第1章で提示し詳述してきた読み方を継承しつつ、それぞれの作品に迫ってきた。しかし、分析上の「強力な武器」にいくつかの特徴的な手段を追加してきた。

- 1 これまで特定の疑問の解消に努めてきた。つまり、ブレイクの作品における自然の表現を研究してきた。こうすることで目指すべき明確な到達目標を持つことが出来た。そうして、各段階で特定のテーマを理解しようとする関心のおかげで、明確な疑問を形成し、その答えを追究することが可能となった。
- 2 最初に、第1章で「無垢の世界」と「経験の世界」について学んだことをまとめた。第1章で着目した多様な共存する視点は自然のテーマと関係している。また、本章の最初にこの関係について考察することで、検討しているテーマの内容を明確にすることが出来た。従って、自然の認識法を検討することになるという理解をもって始まり、自然自体に関するどのような理念とその意味の広がりや競合する認識法に存在するのかを発見できるのか期待していた。
- 3 『無垢と経験の歌』から脱線し、預言書群のひとつの作品に進んだ。その作品ではブレイクの世界観を補充する論考が更に明らかになった。しかし、その作品の寓意的、隠喩的形式のために、その解釈がより難解になっている様相を呈していた。
- 4 『天国と地獄の結婚』に対しては選択的な読み方を採用してきた。つまり、その預言書の中で解釈が冗長にならざるを得なかったり、引用の検討が必要となるような箇所は無視してきた。その代わりに、『無垢と経験の歌』の中ですでに検討してきた理念やモチーフに対する確認と広がりを求め、見出してきた。
- 5 このような選択的読み方で、『天国と地獄の結婚』の中の議論になっている箇所よりは、自

然主義的な箇所にも焦点を当てていた。詩作品や散文作品にも応用できる同じ焦点の当て方で言語とその効果に着目しつつ、これらの箇所を読み解くことが出来る。立派な参考文献の助けを借りたより複雑な比喩表現や名前の解釈は、文学作品としてのブレイクの作品の健全な理解の準備が出来るまで、後の段階まで延期しておこう。

- 6 ブレイクの作品の間でのさまざまな比較を積極的に行ってきた。この結果、いくつかの異なる題材に関するブレイクの理念がまとまって、単一の哲学的総体に収斂し始めている。例えば、「心地よい岸辺」と「琴の弾き手」が見えない天使と地獄のヴィジョンへの拘りを、「大地の答え」における朝に「顔を向ける」ことを拒む大地に例えてきた。また、ケルプにその持ち場を離れるように命令するブレイクと、「経験の世界」における「序の歌」と「大地の答え」に現れる罰を与える神と関連付けてきた。同様に、全裸のライカと「感覚的な喜びの改善」という表現を結び付けてきた。この関連する瞬間を積極的に追及し、その瞬間に関して考察を深め、その瞬間が具体的に示すテーマについて考察することを、ブレイクの作品における「ネットワーキング」の過程と呼べるであろう。『無垢と経験の歌』の作品間のネットワーキングとその詩集と預言書群とのネットワーキングは、研究を継続するにつれてますます実り豊かな読み方となるだろう。

より深い読解への提案

- 1 主観的な認識法と想像力に富んだヴィジョンとしての自然は、一般的に流布したテーマである。自然は直接的にも間接的にも『無垢と経験の歌』のすべての作品に関係している。この章で用いた読み方を使って、「失われた少年」と「失われた少女」を研究することで、『無垢と経験の歌』の「失われた」そして「見つかった」作品群の研究を完成させることが出来る。この2つの作品は宗教的な熱狂と性的抑圧に焦点を当てており、本章で到達した結論を利用してその作品群の研究を深めることが出来る。
- 2 「無垢の前兆」というブレイクの作品を読んでみよう。この詩は1803年頃、『無垢と経験の歌』の出版後10年して書かれ、象徴的表現は難解な作品ではない。しかし、冒頭の四行連は想像力に富んだ現実を述べる評価の高い声明文である。この作品の研究では2つの分析的作業が有益である。
 - a) 「無垢の前兆」とこれまで研究してきた『無垢と経験の歌』の思いつく作品との関連を挙げ、解説を加えてみよう。
 - b) 「無垢の前兆」と『天国と地獄の結婚』における「天国」と「神」の使い方を比較してみよう。この比較を通して、ブレイクの精神的用語の反語的表現と非反語的表現を区別する際に役に立つし、「無垢の世界」と「経験の世界」で見てきた「天国」、「神」、「子羊」に対する移り変わる視点が更に明らかになるだろう。

注解

- 1 本翻訳はNicholas Marsh著 *William Blake: The Poems*(New York: Palgrave, 2001)の第2章である。
 - 2 ブレイクの詩行の翻訳は特別な指摘がない場合は次の訳本から引用している。編者松島正一『対訳 ブレイク詩集—イギリス詩人選(4)』岩波書店, 2007年。
 - 3 聖書からの引用は, 共同約聖書実行委員会『聖書 新共同約—旧約聖書続編つき』(三省堂, 1989年)による。
 - 4 ヨハネの黙示録 第22章1~2節: 天使はまた, 神と子羊の玉座から流れ出て, 水晶のように輝く命の川をわたしに見せた。川は, 都の大通りの中央を流れ, その兩岸には命の木があって, 年に十二回実を結び, 毎月実を実らせる。そして, その木の葉は諸国の民の病を治す。
 - 5 ブレイクの個々の詩作品に関する批評の流れについては次の解説書が有益である。Summerfield, Henry. *A Guide to The Books of William Blake for Innocent and Experienced Readers: with notes on interpretive criticism 1910 to 1984*, Colin Smythe, Gerrards Cross, 1888.
 - 6 この手紙の中の詩の翻訳は以下の文献から引用した。梅津成美『ブレイクの手紙』八潮出版社, 1970年, 49ページ。
 - 7 同上, 50~51ページ。
 - 8 ワーズワースの自然観については, 『抒情歌謡集』に収録されている「ティンターン・アビー」(‘Lines Composed a Few Miles above Tintern Abbey’)の中で簡潔に表現されている。
私は自然と感覚の言語のなかに
私の最も純粋な思考の錨, 育みの手
導き手, 私の心の守護者, 私の
全精神存在の真髄を見出して満足する。(108-111)
 - 9 ホプキンズが提唱した「個性化の原則」とは‘inscape’のことであり, 物質の対象に宿る, 特性の一定の様式であり, その様式はその対象に個性と共に統一感を与えている。次の解説書によると, 「個性化の原則」とは, 単一の物質, あるいは物質の集団の側面のことであり, その側面はその物質の存在の個別的なそして特別の統一性を構成しており, その物質の個性的な特徴的美を構成している。Alex Preminger and T.V. Brogan *The New Princeton Encyclopedia of Poetry and Poetics*, Princeton University Press, 1993, page 609.
 - 10 原注①の翻訳を以下に示す。
ブレイクのアイロニカルな悪ふざけへの趣向の好都合な具体例は, 彼の絵画, 「蠅の幽霊」(1819年頃の作, テイト美術館, ロンドン)に見ることが出来るかもしれない。この作品はブレイクの晩年に, 彼の作品を称賛していた「弟子たち」のために描かれた作品である。おそらく「虎」のデザインはもう一つの視覚的悪ふざけといえる。
 - 11 梅津成美, 86ページ。
 - 12 梅津成美, 89~90ページ。
 - 13 ビューラ (Beulah) とはブレイクの神話世界においては, 潜在意識の領域を表わし, 靈感や夢の源泉となる精神世界のことである。
 - 14 「ニュートンの眠り」とは, 精神世界の存在やその価値を意識も評価もせずに, 目に見える事象のみに関心を寄せる心的状態を表わしている。
 - 15 預言書『ミルトン』の序に含まれる短詩のこと。
そしてあの足が遠い昔の時に,
イギリスの緑の山々の上を歩いたのか,
そして神の聖なる子羊が,
イギリスの楽しい牧場に見られたのか!

そして神のかんばせが,
我々の雲のかかった丘の上に輝き出たのか。
そしてエルサレムはここに建設されたのか,
これら暗い悪魔のような工場の間。
- 持って来い私に私の燃える黄金の弓を,

持って来い私に私の願望の矢を、
 持って来い私の槍を、おお雲は開ける！
 持って来い私に私の戦車を！

私は心的戦いを止めはしない、
 また私の剣が私の手の中で眠ることもないのだ、
 我々がイギリスの緑で楽しい土地に、
 エルサレムを建設し終わるまでは。

梅津成美 『ブレイク全著作』名古屋大学出版、1989年、860～61ページ。

- 16 原注② 社会、商取引、工業に関するブレイクの革新的な見解は第4章で議論の対象となる。
- 17 勝ち目があると思っても、落胆するだけだ。
 見ただけでも打ちのめされるほどなのだから。
 …
- 口からは火炎が吹き出し 火の粉が飛び散る。
 煮えたぎる鍋の勢いで 鼻からは煙が吹き出る。
 喉は燃える炭火 口からは炎が吹き出る。
 首には猛威が宿り 顔には威嚇がみなぎっている。
 筋肉は幾重にも重なり合い しっかりと彼を包んでびくともしない。
 心臓は石のように硬く 石臼のように硬い。(ヨブ記 第41章 1-14節)
- 18 『失楽園』(*Paradise Lost*)はJohn Miltonによる叙事詩。1万行からなる大作で、1667年初版は10巻、74年12巻に改編。… 旧約「創世記」1-3章に描かれる天地創造と、人間の始祖AdamとEveが、蛇に変身した墮天使Satanの誘惑によって、禁断の木の実を食べたために楽園から追放される物語に材をとり、「神の道の正しさを人びとに明らかにする意図のもとに書かれた。上田和夫編 『イギリス文学辞典』研究社、204年、265ページ。
- 19 原注③ ブレイクは次のように記していた。「ミルトンが天使と神について書いた時は枷にかかって書き、そして悪魔と地獄についての時はのびのびしていた理由は、彼が本物の詩人でありそのことを知らないで悪魔の一党であったためである」『天国と地獄の結婚』梅津成美 『ブレイク全著作』、282ページ。
- 20 原注④ Erdman, David V., *The Illuminated Blake*, London 1975, Oxford University Press, p.84.
- 21 Emanuel Swedenborg(1688-1772)はスウェーデンの科学者・神秘思想家。ストックホルムに生まれ、ウプサラ大学などに学び、鉱物学・機械学の領域で名を成したが、しだいに異常な霊的啓示を体験するようになり、1747年、それまでの科学的研究を一切やめ、心霊的な研究に没頭。主著は*Heaven and Hell*(1758; 英訳1778)ほか。彼の教えに基づき、1778年ロンドンにNew Jerusalem Churchができた。英米文学では、W. Blakeを初めとして、Coleridge, Emersonらが、その影響を強く受けた。上田和夫編 『イギリス文学辞典』研究社、2004年、340ページ。
- 22 原注⑤ 「この目的に相応しい有用な参考文献が本書の末尾にある推薦図書に掲載されています。」なお、ブレイクのコンコーダンスとしては以下の参考文献がある。Erdman, David V. (Editor) *A Concordance to the Writings of William Blake*, New York: Cornell University Press. Volume 1-2, 1967.

(みやまち せいいち 札幌学院大学人文学部教授 イギリス文学専攻)